
耳をすませば～青い鳥が運んだ願い～

イヌズキノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

耳をすませば〜青い鳥が運んだ想い〜

【Nコード】

N9874C

【作者名】

イヌズキノネコ

【あらすじ】

『耳をすませば』に登場する月島雫が描いた小説をわたしの世界観で創造したものです。物語はレアドールという小さな街から始まります。600年前まで不思議な力”魔法”が存在していた世界を舞台に繰り広げられる心躍る夢物語。あなたも主人公アリスと一緒に、バロンが見せてくれるファンタジーの世界へと足を踏み入れてみませんか？

1 小さな世界より（前書き）

本作品は、原作者である柊あおいさんの描いた世界とは別の世界を描いています。そのため共通する登場人物もバロンだけで、その他のキャラクターはすべてオリジナルです。

小説初心者ですので、読まれる方には色々とご迷惑をお掛けするかも知れません。何か不都合な点でもある場合には、いろいろなご意見を頂けたらと思います。

1．小さな世界より

森の歌声に、耳を傾けよう。

空に瞬く光から願いを聞き取ろう。

そうすれば、見えないものが見えてくる。

風が運んでくる海の想い、森の想い、人々の想い　　各々の想いが僕の身体を通り抜ける時、脳裏に遠くの景色が広がっていく。

この街に育ち、外の世界を知らない僕。体の自由が制限されてしまった生活の中で、僕が知ることのできる世界はこの部屋と、この部屋から覗き見ることができるもの。見たことのないものは想像の中でのみ存在する。

以前、ファルスが大きな湖について話をしてくれたことがあった。

湖とは、雨の日にできる水たまりが大きくなったものらしい。それよりも大きい水たまり。みんなはそれを海と呼ぶ。海には船という乗り物が浮かび、船には何百という人を乗せる事が出来るという。僕の想像では海の大きさを測ることができそうにない。少しだけ残念な気持ちになった。

ファルスはその船に乗り、ハルバニアという街を訪れた。

ハルバニアは商業の盛んな街で、中心にある時計塔がシンボルとなっている。時計塔の頂上には黄金に輝く鐘があり、街の人は時刻を知らせる鐘の音を頼りに生活をしているそうだ。時計塔から3方向に大きな道が伸びていて、上から見るとちょうどY字になっている。3つの通りはそれぞれ、山の産物を扱った商業地帯・海の産物を扱った商業地帯・工芸品を扱った商業地帯に分かれている。大通

りから枝状にのびる小道にも露店が店を連ねており、そこには普通の暮らしではお目にかかることのない特殊な物が売られているらしい。

ハルバニアで用事を済ませたファルスは行きと同じく、帰りも船を利用した。船に乗り込んだとき、空を覆う雲は泣き顔を見せていた。

船が進むにつれて、雲が涙を流し始める。

時間が経つにつれて、空から落ちてくる音は激しくなる。

音が激しさを増すにつれて、海は身体を大きくうねらせて船を揺らす。

大きな音に海が怒っているらしい。

怒った海は、山にも見える水の塊を作り出す。波と呼ばれる塊を船は斜めになりながら滑っていく。一つ間違えば、船は波につぶされてしまう。

大きく揺れる船内。ファルスは船内の柱にしがみつく以外何もできなかつたらしい。

轟音と大きな揺れの中で、時間が早く過ぎる事を願っていたという。

音が静かになる頃、先ほど怒っていた海はいつもの静けさを取り戻していた。目の前には終点が見えていた。

ファルスは海の話とハルバニアで買ってきた変わった目を持つ人形を、お土産として僕にくれた。海の偉大さを教えようと思いついたみたのだが、残念なことに……僕は偉大さを感じることなく、巨大な恐怖の対象として海が頭の中に存在していた。

ランプに照らされた机の上に、一枚の紙と筆を握った僕の右手が映る。

「あなたにとっての海はどのような存在ですか？」
問いかける言葉を、筆は文字へと変換していった。

2・風の便り

窓から太陽の光が差し込んでくる。目を閉じているにも関わらず光は強く輝いていて、まるで針が瞼に刺さっているような感じがした。

頭の中にいる住人がゆっくりと動き始める。ぼやけた視界の中で、意識が徐々に目を覚まし始めた。

「アリス、もうそろそろ起きてきて。ご飯の準備手伝ってちょうだい」

寝ぼけたままの私は耳に入ってきた言葉をそのまま受け流し、もう一度ベッドに倒れこんだ。

「聞いているの？ アリス、起きなさい」

階段を上る音が近づいてくる。音は一定のリズムで打ち出されている。その音が止むと、次はドアを開くノブの音が聞こえてきた。

「アリス、起きなさい」

揺すられている体と聞こえてくる声。薄らと開けた瞼の向こうに、母のあきれた顔があった。

トン、トン、トン、トン

リズムミカルな朝の音。母は山菜を一口サイズに切り分けている。その横にいる私は、机の角で卵を叩いていた。殻が割れる感触で行動を切り替え、割れた場所から中身を取り出す。

「卵とハムを火にかけて、お皿に乗せておいてちょうだい」

「はい」

まだ寝ていたいと訴える欲求を抑えながら、私は料理を続けた。

火にかけていたフライパンに、ハムと卵を置いていく。卵とハム

が音を立てながら香ばしい匂いを漂わせてくる　お腹からの訴えが、寝たい訴えを押さえつけた。

白くなつていく卵と小麦色の肌を見せだすハム。黄色い目玉が徐々に輝きを失つていった。

焼いたハムと卵を皿に盛り付けて、リビングにあるテーブルへと運んだ。テーブルには山菜のサラダとパンの入ったバスケット、私の作ったハムエッグが並べられている。コップにミルクを注ぐと、本日の朝ごはんがすべて出そろった。

においに誘われるよう、父がよろけながら部屋に入ってくる。

「アリス、ヤツクルを起こしてきて」

母の声を背に受けて、私は部屋を出た。

階段を上がり、廊下の途中にある右手側のドアを開けた。

「ヤツクル、起きなさい。ご飯できてるよ」

ドアの向こうに広がる弟の部屋。部屋は意外にもキレイに整頓されていた。

部屋の右側に机が置かれ、その机にはいくつかの本が並んでいる。机の前には窓があり、外からの光が机上を照らしていた。左側にはベッドが置かれて、ベッドの脇に目覚まし時計が横たわっている。私の部屋とは配置が逆だが、それ以外はほとんど同じような部屋である。

ベッドで身をよじりながら、ヤツクルは眠り続けている。起きそうにない弟に私は背中をドンと叩いてやった。

「何するんだよ」

「起きなさい。ご飯冷めちゃうじゃない」

「うう………わかったよ」

その言葉を聞いて、私は部屋を出た。

部屋を出たところでもう一度確認。ドアを開いて中の様子をうかがった。

「……………」

ベッドで動かない様子の弟。

やっぱり……。

私はさっきより強めに背中を叩いた。

朝食を済ませた後、父は仕事場となる役所へ、母はパン屋へそれぞれ出かけて行った。仕事で日中いない両親に代わって、ヤツクルの面倒は私が見ることになる。

私は今年で16、ヤツクルは14。

やんちゃな時期のヤツクルは近所でも有名な悪坊主で、私の仕事はその後始末がほとんどだ。『アリスちゃんも大変ね。ヤツクル君の面倒ちゃんと見てあげるのよ』なんて近所のおばさんにいつも同情の眼を向けられている。損な役回りだが、私にとって重要な仕事である。

正午に差し掛かった時、家のチャイムが鳴った。

家の前には、深緑色の制服に身を包んだ青年が一人立っている。

「アリスさん宛てに手紙が届いています」

青年は白い封筒を差し出して、にっこりと笑みを浮かべていた。

封筒を受け取り、軽く挨拶をした後、去っていくうしろ姿を私は見送った。

私は青年から受け取った手紙を持って、自分の部屋へと走って戻った。机に座って封を切る。封筒の中から一枚の紙を取り出す。折りたたまれた紙を広げると、見慣れた文字がそこに並んでいた。

アリスさんへ

お元気ですか？ 最近暑さが増したようで体を崩されたりしていませんか？

僕はいつもと変わらず元気になっています。

最近、絵を描くようになりました。やり始めたばかりで、まだ上手には描けません。

今練習中です。

現在猫をモチーフにして絵を描いています。ドレスを身にまとった猫の人形です。

上手になったら見せたいと思います。

アリスさんは何かやっている事がありますか？ もしよければ教えてください。

メイフォルトより

3・顔を隠した男

つい先日から、この街に奇妙な事が起こっている。

3日前の深夜のことだ。

寝静まった街に、一つの足音がする。足音の中には、カッソ、カッソと別の音も混じっている。

こんな夜中に歩いているのは誰？

興味から音のする方をじっと観察した。

光の届かない、建物に囲まれた路地。姿は闇に包まれている。目を凝らしてよく見ると、薄らとだが左手にステッキが握られているようだ。身につけている服は 貴族のお召し物？

「
」

こんな夜中に人が歩いていることはほとんどない。まして、貴族のような方が一人で歩いているのは不自然だ。私の好奇心がさらに強くなった。

いったいどんな人なんだろう？

私は正体を知りたくなった。

貴族はこっちに向かってゆっくり歩いてくる。私は窓から身を投

げ出すようにして、できるだけ貴族に近づいた。

頭にはシルクハットのような物を深くかぶっている。服は、やはりタキシードだった。男の顔は

「……」

暗い闇のせいではほとんどわからなかった。

だからといって諦めるわけにはいかない。私は、じっと観察を続けた。

貴族はこっちへ近づいてくる、ゆっくり……ゆっくり……と。観察する目にも力が入る。

絶対顔を見てやる！

窓枠に置かれた手が痺れるくらい、身体はギリギリまで外に投げ出されていた。

家の下までもう少し

その時、状況が変化した。

雲に隠れた月が顔をのぞかせていく。街が月の光に包まれていく。先ほどまで真っ暗だった路地にも月明かりが差し込んできた。

暗闇を照らす光が、彼の体をとらえた。

……隠された顔。そこに白い包帯が巻かれていた。

この不審者は、今まで4人の人に目撃されている。深夜の目撃証言であるため、曖昧なところが多く信憑性に欠けるところがある。

杖を持っていたとか、持っていなかったとか。タキシードを着ていたとか、マントを羽織っていたとか……。

そこで、その真意を確かめようとする子供たちが夜中街を徘徊するという騒動を起こしてしまった。昨夜のことだ。

まだ事件は起きていないものの、不審人物であることに変わりはない。そんな者を子供たちと遭遇させるわけにはいかないと思った大人たちは、“夜10時以降の外出禁止”を街の規則として定めた。言わなくてもいいことだが、騒動を起こした主犯はヤツクルである。

「姉ちゃん、どうしておれだけ一日中家の中で過ごさないといけないんだよ！」

「だって一度外に出したらどこ行かかわからないじゃない。夜に帰ってくる保証もないし……。だから今日は一日外出禁止！ 昨日の今日でまた問題起こされたら、お父さん今度は泣いちゃうよ」

街の役所に勤務する父は、規則に厳しい人だ。威厳があり、律義な性格をしている事から街の人から頼られる存在となっている。子供の頃は今のヤツクルと同じように悪さをしていたらしいが、大人になって変わったらしい。『あのボルトン君が……信じられないよ』なんて、隣のクルミおばあちゃんが話していた。でも、最近はヤツクルの悪さで評判も落ちてきている。『やっぱり親子だね』そんな言葉がよく耳に入ってくる。

「そういうわけだから、今日くらいおとなしくしてなさい」
そういうと、ヤツクルはしぶしぶ部屋に引き返して行った。

昼食を済ませた午後の時間。

私は庭で洗濯物の取り込みを行っている。

雲ひとつない空の下で大きめのシャツが優雅にはためき、太陽の匂いが衣類からこぼれる。色とりどりの衣が風を受けて、家族仲良く宙を羽ばたいている。

暖かな日差しが心地よい午後時間。私の一番好きな時間である。昼を過ぎたこの時間帯は、近所を歩く人の足も止まっている。私ひとりが太陽の下で佇んでいる、そんな雰囲気が好きなんだろう。目を閉じれば、身体を通り抜ける風を感じる。鳥の声が風に乗って私の耳に運ばれてくる。全身を照らす日の光が体の中まで温めていき、ポカポカした感じがまた心地良い。

胸の内で静かに、心が鼓動を繰り返していた。

「こんにちは、お嬢さん」

突然の訪問者に、ゆっくりとした時間は終わりを告げた。夢心地の私は、現実へと呼び戻される。振り返ると、白色のジャケットに身を包んだ男の人が立っていた。

「驚かせてしまったみたいで申し訳ない。ちょっとお聞きしたい事があるのだが」

私は固まっていた。

その男の服装は、どこかの貴族みたいで凛々しさを感じさせている。革の手袋で握られたステッキも、きっと高級なものなんだろう。太陽の光をシルクハットで防ぎながらも、防ぎきれない光を受けた白のジャケットは眩しく輝いていた。前に一度だけそういった服装をした人と会ったことがある。母はそういう人を紳士と呼ぶ事を教えてくれた。

まさしく、その紳士の姿が目の前にはあった。しかし、ひとつの

事がその姿を不自然にしている。シルクハットの下、日陰を作っている場所を白い布が覆っているのだ。

「昔、この近くにマルス・ファアレットという工芸品を扱ったお店があったと思うのだが、知らないかい？」

問いかける言葉は耳に入ってこない。

間違いない。目の前にいるその人こそ、最近噂になっている人物だ。目撃情報と一致する。

困惑したまま、その場で私は固まってしまった。

「お嬢さん？」

透きとおる声が頭の中に響いて、止まっていた時間が動き始めた。「あつ、すみません。ぼーとしてたみたいで……。あの〜どんな話でしたっけ？」

「失礼。突然訪ねられては戸惑ってしまうのも無理はない。話というのは、この近くにマルス・ファアレットというお店があったと思うのだが……。お嬢さんは知らないかい？」

「マルス・ファアレット？」

聞き覚えのない名前だった。少なくとも私が生きてきた時間の中では存在しない。

「昔、この辺りで工芸品を扱っていたお店なのだが……。知らないのであれば、仕方がない。ありがとう、お嬢さん」

そいうと、彼は一礼をして私の視界から消えていった。

白昼の中での不思議な出会い。“マルス・ファアレット”という言葉が耳に残った。

4・不安

あの日の出来事は、誰にも話していない。あの日、彼に出会ったのは私一人らしい。あんなに目立つ格好をしていたのに……、夜ではなく昼という誰もが起きている時間にもかかわらず……。

今ではあの出来事が夢なのでは？　と考えている。

一応父にマルス・ファレットというお店がこの街にあったかどうかを聞いてみた。父も知らないらしく、街のことについて書かれている文献を調べてみると言ってくれた。

そして、あの出来事から2ヵ月が経とうとしていた

その後、不審者を目撃した者は出ていない。今では不審者に関する噂も消え、みんながいつもの生活に戻っている。わたしもあの出来事を忘れかけていた。いや……完全に忘れて去っていた。なぜなら今の私には、そんな事よりもっと重大な出来事が起きていたから。

ジリリリイ……

家のチャイムが鳴る。

私は駆け足で、玄関に赴いた。玄関先には青年が一人、手には白い封筒が握られていた。

「アリスさん宛てです」

私は封筒を受け取ると、すぐさま自分の部屋へと駆け込んだ。

部屋に入ると椅子に腰かけることなく、封筒を開け始めた。はやる気持ちを抑えつつ、封を切っていく。中から取り出された手紙。そこにはいつもの文字とは違う文字が並んでいた。

アリス様へ

初めてお手紙を差し上げます。私はメイフォルト様に使えるヴァンステイという者です。

先月よりメイフォルト様が体調を崩され、今回私が手紙を書くことになりました。

現在メイフォルト様はベッドの上での生活を送られております。アリス様に返事が遅くなったことを悔やんでおられます。

その事をどうかお許しいただきたいと思います。

また、手紙をやり取りすることが困難な状況であるため、しばらくの間連絡を絶たせていただきます。

身勝手なことで申し訳ありませんが、承諾していただきたく思います。

最後にメイフォルト様からアリス様への伝言です。

“ 僕は大丈夫です。 ”

ヴァンステイより

2カ月前の手紙からメイフォルトとの連絡が途絶えていた。今までは長くても2週間以内に返事を返してくれていたのに……。彼からの返事をこれほど待ち遠しく思ったことはなかった。

最近はその事ばかりを考えていて、気がつくと玄関先を見つめていた。いつ届くかわからない手紙を待つて、期待と不安が渦巻く中で生活を送ってきた。

そして、今日手紙が届けられた。届いた手紙は、ヴァンステイという者からのモノ。彼はベッドの上から動くことができないという内容のモノ。

私を何かが黒く染めていった。悪い予感が頭の中いっぱい広がった。

この前の元気な姿はどこに……。

彼がくれた“大丈夫です”の言葉が、私をより一層不安にさせていった。

5・始まりのとき

彼との関係は、とある偶然から生まれた。
私が14歳の時だった。

私の家から30分ほど歩いたところに、数隻の船が止まっている波止場がある。その頃の私は、近所に住むメアリ・カルロス・マルダ・弟のヤツクル達とこの場所へいつも遊びに出かけていた。日中の波止場は人の寄り付かない大きな空き地となるため、私たちには都合のよい場所だった。

「みんな持ってきたか？」

カルロスが問いかけてくる。私とヤツクルは両手に持った板を見せた。メアリは針金を10巻き程抱えている。カルロスは、各々が抱えている荷物を確認した。

「よし！ では早速作業に取り掛かろうぜ」

「あのマルダがいないけど、今日は来ないの？」

メアリの大きくクリクリとした瞳が、カルロスに疑問を投げかける。

「あいつ今日はちょっと用事あるみたいだからさ、遅れるんだって。その代りみんなが喜ぶもの用意してくるってさ」

カルロスはいつもの調子で答えた。

私たちは今イカダ作りの真最中。“この夏みんなで旅に出よう”という事からこの作業が始まった。カルロスとマルダが『海にはロマンがある。絶対楽しい』なんて言うものだから、ヤツクルは乗り気になり、それにつられるよう私とメアリも参加した。カルロスが読んだ小説からの発想だそうだ。

今は先の事なんて考えず、イカダ作りがメインとなってしまうているわけだけど。

「アリス、ちよつと板を支えてくれ」

「今手が離せないから、ヤツクルに言つて」

「ヤツク、こつち手伝つてくれ」

カルロスは手招きをしながらヤツクルを呼んだ。ヤツクルが板を押さえ、カルロスは釘で板をイカダに張り付けていく。カルロスの太い腕と大きな体格が、如何にもこの作業に合っている。私とメアリは、針金を伸ばしてイカダの土台である丸太1つ1つが離れないよう補強を施す。地味な作業だけど、意外なほど重労働である。

1時間が過ぎる頃、作業に熱が入っている私たちは額に汗を浮かべていた。拭えど拭えど、垂れてくる汗に、少しずつ集中が切れかかっていた。

「遅くなってごめん。そのかわり土産もってきたからみんなで食べようぜ」

突然割り込んできた声に、体が反応する。声のする方に目を向けると、一人の少年が手を振っていた。

ウェーブした茶色い髪、シャープな顔立ち。カルロスのようにポツチャリ体質ではなく、ガツシリとした筋肉質の体。

やってきたのはマルダだった。

マルダの左手には、パンが詰め込まれた袋と飲み物が掲げられている。マルダの実家はパン屋を営んでいて、今日はその手伝いをさ

せられていたらしい。それで、余ったパンをこっそり持ち出してきたとか。

マルダが来たところで作業を中断し、私たちは休憩に入った。

「さすが……。お前の家のパン、うまい！」

頬を膨らませて、カルロスが感想を漏らす。

「当たり前だろう。まずいなんて言った今度から食わせないからな」

「でも本当においしい。マルダが作ったものもあるの？」

「まあね、一応修行中だから。アリスは料理とかしないのか？」

「マルダ、ダメだよ。お姉ちゃんに料理なんてされたら……」

「ヤツクル 何か言った？」

パンを頬張ったまま、ヤツクルを追いかける。必死に逃げるヤツクル、追う私。それを見て、カルロスとマルダは笑っていた。

そんな中で、メアリはひとり黙々と食事をつづけている。

メアリはお金持ちの家のお嬢様で、家の中ではマナーにうるさく言われてきたらしい。食事中に騒ぐのはもちろん会話さえしない。私たちと会うまでは、家から出る事もほとんどなかったようだ。ある日、窓からさびしそくに顔を出す少女を見て、カルロスが強引にでも連れ出そうと考えなかったら、ここにメアリはいなかったかもしれない。

今は少しずつ私たちとの付き合いに慣れてきている。

みんなが食事を終えると、談話の時間に入った。将来の夢やこれからの事について冗談を交えながら話をした。

「やっぱりマルダはパン職人啊。カルロスは？ おじさんの後を継いだりするのか？」

「いいや。大工の仕事も楽しそうだけど、ほかにも仕事っているい

るあるだろう？　だから、今はまだ考え中。そういうヤツクは何になるんだ？」

「おれは……………医者とか？」

「おまえが医者！　怖いな。薬を飲むのにも命がけになりそうだな。安心しろよ。バカが治る薬作ってやるから」

ムスツとした顔をするヤツクル。怒った顔のカルロス。その周りで満面の笑みを見せている私たち。人気のない波止場に笑い声がこだました。

笑いながら私は“男の子にはいろいろ夢があつていいな”と思った。

女の子には結婚するくらいしか夢がない。母のように近所の手伝いとして働くことはあっても、女の人が仕事をしているなんて聞いた事がなかった。

「アリス、おまえは何かないのか？　警官とか想像できるんだけど」「うーん。私もまだ考え中」

本当は好きな人と結婚する事とは言えなかった。

夢と言えば夢になるが、これは女の子にとって唯一の選択肢なのだ。だから今話している夢とは別のものだし、この場で言うのは不釣り合いだと思った。それに結婚なんて、実際に待ち受ける未来の話をしたくなかったからでもある。

「メアリは？」

カルロスは間髪をいれずに訊ねた。

「私はね、学者になろうと思うの」

「えっ！」

私は驚いた。

「学者といっても考古学者。昔の出来事や文化を調べるの。600年前の出来事について、まだはっきりとした内容がわかってなかったりするから、それを調べてみたいと思ってる。知らないことを発

見するって楽しそうだし……だから、今はそのための勉強として昔の資料や文献なんかを――

みんなも驚いていた。女の子なのに学者になるなんて　はじめはそれだけの驚きだった。けど、聞いて行くうちにその言葉が冗談じゃない事がわかってきた。はつきりとした意思を持って、将来を考えている。メアリ以外は誰一人としてそういった事を考えたことはなかった。今はまだ子供であることを満喫する、そのことしか考えていなかった。この話だって冗談交じりのものだったはず……。そんな中でメアリの口にした言葉は、私たちに強い衝撃を与えた。“私たちはまだまだガキなんだ”って思い知らされた気がした。それと同時に、メアリが急に大人びて見えた。

「俺たちも努力しなくちゃな」

マルダの言葉に、私たちは深くうなずいた。

夕日が海に沈むころ、みんなで帰り道を歩いていた。炎天下の中で作業をしたせい、白い肌のメアリは赤みを帯びている。

……最近すこし焼けてきているかも。

帰り道は、イカダがあと3日もすれば完成するということもあってどこを旅するかの話で盛り上がっていた。話を聞きつつも、私は昼間の出来事を思い出していた。

自分の夢　　今までは結婚だけしか考えていなかった。

……いや、結婚しかないと縛っていた。
本当は何をしたいのだろう？

初めて自分を見つめていた。

途中の道でみんなと別れ、私とヤツクルの二人だけになった。さつきまでの賑やかさが嘘のように、今はシーンとしている。

玄関をくぐりドアを開けようとした時、苦しそうな鳴き声が聞こえてきた。

クツクルウ……

静けさの中に響き渡る声は、庭の方から聞こえてくる。レンガを積み重ねた家の壁、声はその壁の方からしている。壁と地面が交わるころ、暗くてよく見えないが、必死にもがいている物体がいた。それは、羽を必死に羽ばたかせている鳥だった。何かの拍子で壁に激突し、おそらく空を飛ぶことが出来なくなったのだろう。

私はもがく鳥を両手でそっと救い上げた。

家に入り、私は母から手当ができる物を借りた。

鳥の羽からは薄らと赤いものが流れていたので、まずその部分に消毒液を当てた。あばれる鳥を抑えながら、次にその部分に包帯を巻いていく。

青い羽根と黄色い嘴。鮮やかな色合いをした綺麗な鳥。

私は美しい鳥に目を奪われていた。……だから、手当を済ませるまで気がつかなかった。鳥の足に巻きつけられている何かに。

私はその何かを足からそとはずす。くるくると巻いてあるそれを広げると、そこには字が書かれていた。

この手紙を読んでくれる誰かがいることを願います。
はじめまして、私はメイフォルトといいます。

このような手紙に驚かれていますと思います。

私は今まで鳥かごの中でしか生活してきませんでした。そのため外の世界を知りません。

外の世界について知りたいという好奇心からこの手紙を書きました。
これを読んだ誰か、私に外の事を教えてくれませんか？
返事を待っています。

メイフォルトより
エルハーバン1番街14-2

内容を理解するのに、少し時間がかかった。

はじめは誰かのイタズラだろうと思った。次にこの鳥がメイフォルトというのか、と考えた。しかし住所が書いてあることからイタズラでもなければ、この鳥がメイフォルトというのではないことがわかった。いや、イタズラかどうかはまだはつきりしないが……。
ただ文通相手を見つけるために、このような事をしたことだけはわかった。

けれどもいくつか疑問が残っている。

鳥かごでの生活？ 外の世界？

意味することが私にはまだわからなかった。

「どうしようか……」

顔の見えない不思議な相手からの手紙。私はどうすべきか悩みな
がら、机に頬杖をついていた。

翌日、私は手紙を書いていた。昨日届いた手紙の返事である。いろいろと悩み考えてみたが、ひとまず返事だけでも出すことにした。昨日のメアリの話が、決定打となった。

私は何をしたいのだろうと自分について考えた。しかし、何も知らない私では答えなど出せるはずもない。……私はこの手紙の相手と同じように外の世界を知らないのだ。だったら、これは外の世界を知るいい機会なのかもしれない。私とは別の土地で暮らす誰かを知ることは、外の世界を知ることになるのだから。

そついう気持ちから、手紙を書く事に至った。

メイフォルトさんへ

はじめまして。お手紙読ませてもらいました。

私はアリスといいます。あなたの住んでいる街から海を隔てたところにハルバニアという大きな街がありますが、そこから少し離れたレアドールという街に住んでいます。

私も外の世界についてほとんど知りません。あなたの役に立てるかわかりませんが、あなたと力になりたいと思っています。

私の知らないことをあなたが知っているのであれば、私に教えてください。

アリスより

レアドール3番街1-13

初めて書いた手紙。返事をくれるかどうか不安だった。もしイタ

ズラだったら……という不安もあった。

数日後、手紙が届いた。もちろんメイフォルトからの手紙だった。

6・幸せな時間

その後も手紙が来れば返事を書き、また手紙が来れば返事を書いた。その繰り返しをやり続けて、気が付いた時にはメイフォルトと文通を行うようになっていた。

文通の中で、彼についていろいろなことを知っていった。

メイフォルトは男の子で私と同じ年であること、どうやら高貴な家柄の子であること。誠実な性格で、負けず嫌いであること。髪は短めで、私と同じブラウン色をしている事。

それから“鳥かごでの生活”、“外の世界”の意味。

彼は幼いころから体が弱く、外に出る事ができないらしい。病気に陥りやすくベッドの上が彼の生活の場となっている。彼の世界は一つの部屋の中だけ。それは鳥かごのようなモノ。だから家の外に広がる世界の事を知らない……。

はじめの手紙に比喩的な表現をしたのは、同情から文通相手になつてもらいたくなかつたからだという。あんな奇怪な表現されたら、読んだ相手は悪戯と考えてそのまま処分してしまいそうだが……。

彼について他にもわかつたことがたくさんある。

彼は自分の体を不自由などと考えたことは一度もない。与えられた状況をいかに生きようかと考えている。もともと縛られた人生だけど、その中でも出来ることはたくさんあると言っていた。私はその逆だった。自由が与えられた人生を自ら縛ろうとしていた。

彼との出会いは、私の人生に幅を与えてくれた。

私に手紙を運んできた鳥は怪我を完治させた。今では元気に空を

飛びまわっている。朝空へ飛び立ち、夜になると私の窓をくちばしで叩く。この鳥にとって私の部屋は戻ってくる家となっていた。

懐いてしまったこの鳥に私はメイと名付けた。もちろんメイフォルトからとってつけた名前である。メイフォルトがこの鳥のように空へ羽ばたけるようにという願いを込めて。

彼に手紙を書くときは、必ずメイに相談する。どんな話をしようか？ こういう話は面白い？ なんて。メイはいつも私の言葉を頷きながら、すべての話を聞いてくれた。

彼との文通が始まって、約1年が過ぎ去った。手紙を通して、私たちは何でも話せる仲になっていた。

去年は外で遊びまわっていた私も家事を手伝うようになり、今では遊びに出ることも少ない。そういえばカルロスやマルダと最近会っていない。あの日のメンバーで遊ばなくなったのはいつからだろう。マルダが本格的にパン職人の修行を始めた頃？ メアリの父さんから雷を落とされた時？ それとも……カルロスが豚になった時？

……最近カルロスは太りだした。成長期のせいだろうか？ もともとポツチャリとしていたが、決して太っているなんて思ったことはなかった。それが見る見るうちにポツチャリとは呼べなくなってしまった。太った体型では、前みたいにいるいろいろな事が出来なくなった。太りに太った体はついに部屋から出る事ができなくなっ

まった。

通称：カルロス豚事件。

.....。

というのは嘘で、実際の話はこうである。

最近この街にきた家族がペットを飼っていた。ペットというのは小柄な豚で、カルロスと呼ばれていた。それを知った私たちは、カルロスの事を“豚”と呼ぶようになった。カルロスはちよつと怒ったように演じつつも、別に気にしていない様子だった。

.....だが、被害はこれだけにとどまらなかった。私たちがカルロスを豚と呼ぶのを聞いていた近所の人達もまた、カルロスを“豚ちゃん”と呼ぶようになった。そして、ペットの豚を“カルロスちゃん”と呼ぶようになったのだ。さすがにカルロスも、これは我慢できなかったようだ。

ある日、カルロスは豚に挑戦状をたたきつけた。決闘でどちらがカルロスにふさわしいか決めるつもりらしい。決闘前になんとか食い止める事ができたが、あまりにバカバカしいこの事件は街中の噂となった。これが、カルロス豚事件である。

久々の珍事件をメイフォルトに話したら、彼は大爆笑したようだった。そして“君には素敵な友達がいるんだね”と、羨ましそうな一面も見せてくれた。

手紙だけのやり取りでつながった私たち。
手紙の中でわかっていく彼の姿。

会ってみたいと思う気持ちを抑え、筆を走らせた。

「メイみたいにきつと、素敵な目をしているんだろっね？」
私のつぶやいた言葉に、メイは小さくうなずいた。

7・友の声

「ん……」

頭の中がモヤモヤしている。目の前には、ぼやけた景色が広がっている。

あれ？

さつきまで私は手紙を書いていた。メイと相談しながら、どんな事を書くのか決めていた。だけど、書いていたはずの手紙が……見たたらない。あるのはメイフォルトからの手紙だけ。

「クルツクウ……」

視界を横にずらすと、メイが心配そうな表情を浮かべている。

「私……」

ゆっくり頭を持ち上げる。高い視点からの景色は、私がいつも目にしている机に座った時のモノだった。どうやら机にうつ伏せになっっていたらしい。だけど、どうして机にうつ伏せていたのだろう？

書いていた手紙は？

記憶の糸を手繰り寄せる。

「そっか……」

私は思い出した。そして、今の状況を理解した。

昨日、私はメイフォルトから届いた手紙を読み返していた。ここ数日不安で眠れない日々を送っていたため、その不安を紛らわせたいと思って起こした行動だった。

手紙を開くと、そこから元気な彼の姿が浮かんでくる。他の手紙からも彼の元気な姿がうかがえて、私は手紙を開く毎に涙を流した。あの頃がどれだけ幸せだったのかを、私はその時初めて知った。

ある手紙には『僕の命はいつ終りを迎えるかわかりません。だから

「ら今を後悔しないように生きていたいと思っています」と書いてあった。彼は身体が弱体していく病気を抱えていて、それは現時点では治すことのできない不治の病だった。それでも強く生きていることが手紙には記されていて、ヴァンステイという人が書いた手紙が偽りのモノではないのかと疑った。

そうやって読み返していくうちに、現実から目を背けていく自分がいて、その事に気がついた時、私の中に潜む闇がより大きな存在となって私を襲った。闇に襲われた私を、疲れた体が夢の中へと避難させた。

つまり、私はいつしか現実から夢の世界へと誘^{いよせ}われて、その世界にいたようだ。先ほど手紙を書いていた私は、夢の中にいるもうひとりの私だったらしい。あまりに幸せな夢だったために、そんな事に気がつかなかった。

現実に戻ってきた私は、目の前に広げられた一枚の手紙を見つめていた。それはメイフォルトの書いたモノではなく、彼の元気な姿が浮かんでくるモノでもない。病気で苦しみ、倒れている彼の姿を思い浮かばせるモノである。

私は現実を受け留め、嘆きの声を上げた。

神様はどうしてそんな事をするの？

一生懸命に生きている人にどうして試練を与えるの？

彼にはもう十分すぎる足枷が付いているのに……。

大切な人を……メイフォルトをこれ以上苦しめないで！

声を聞き入れてくれる者はなく、虚しく心に響くだけだった。

私はまたしても不安に押しつぶされてしまった。耐えきれなくなつた私は、逃げるように一冊の本を手にした。手にしたものは『も

う一つの世界』というタイトルの本。前にメアリが貸してくれた本である。

本を開いて、活字の並んだ文を目で追った。読んでいるところは102ページ。中途半端なところから読みだしたため、どういう本なのかはわからない。けど、今の私にはそれでよかった。内容なんてどうだってよかった。ただ現実を少し忘れたいただけだから。

文の中では、昔の人の暮らしが書かれていた。今とほとんど変わらない暮らしのようだが、少し不便であったようだ。まず移動手段に汽車がない。それから、医学という学問が存在しない。人間が生きていく上で必要なモノがないなんて、とんでもない世の中である。

『昔の人は、不思議な力で病気を治していたんだって』

ふと、メアリの言葉が脳裏をよぎった。

600年前に起こった出来事以前、この世界には魔法があった。

現在では調べられないため、あくまで推測の話だが文献にそのような力について記されたものがあるらしい。だが今の時代にそのようなモノはない。そんな力は存在しない。だから、その代わりとなるモノが今の世界にはできた。

私は読んでいた本を閉じて、天井を見上げた。そしてゆっくり目を閉じて、心の中で一言つぶやいた。

魔法みたいに特別な力があればいいのに……。

手紙が届いて5日が経った。眠れない日々を送っていた私は、久しぶりに朝食の手伝いをしなかった。

朝食の時。両親と弟は心配そうに私を見ては、

「もう少し休んでいなくていい？」

と声をかけてきた。

私は首を横に振るばかり……。寝たくても眠れない、それに眠ったら眠ったで嫌な夢が襲いかかってくる。もう一度あの夢が見れるならいいけど、今までで幸せだと感じた夢はあの夢が最初で最後だった。だから今は寝ることが怖い……。起きて何かをしている方が精神的に楽だった。

お昼過ぎ、私は洗濯物を取り込んでいた。

この前までは幸せに感じていた時間も今では好きになれないでいる。太陽は光を注いでいるのに、私には雲がかかったような天気に見える。鳥の声も聞こえない、風を感じる事もない。

私はまるで人形のようにその場所に置かれているだけだった。

「アリス」

私を呼ぶ声が聞こえる。

「アリス、顔色が悪いけど……大丈夫？」

そこにはメアリがいた。

メアリは私の事をひどく心配してくれていた。ヤックルや近所のおばさん達から話は伝わっていたらしい。メアリは一生懸命に話しかけてくれたけど、声は耳に届いてこなかった。

ただ頷いているだけの会話。

それでもメアリは私に声をかけ続けてくれた。

「そのときマルダがね」

元気づけようと楽しい話をしている。人の失敗や不幸を笑い話にするのは、メアリの嫌いなことだった。けど、今メアリはそういった話で私に笑顔を取り戻そうと一生懸命に頑張っている。

それに私は応えられず、ただ俯き続けていた。

「……………」

どのくらい時間がたったのかはわからない。今もなおメアリの話は続いていた。自分の嫌いな事なのに、ずっと……………ずっとやり続けていた。

……………もういいよ。

心配してくれてありがとう。

そう言おうと思って、私は顔をあげた。

彼女の方を向いたとき、メアリの眼はすこし潤みを帯びていた。ちよつとずつ充血していく瞳。何かに耐えるよう、両手はこぶしを握りしめている。笑った顔は少しひきつっていて、作られたものだとすぐにわかる。

私はメアリの姿を見て、言葉を失った。

彼女の顔を眺めていると、頬を一滴の水が流れた。流れる水は頬を伝って口元に行き、そのまま通り過ぎて地面へと落ちた。

「メアリ、あのね」

私の口から言葉がこぼれ出た。なぜ言葉が出てくるのかわからない……………。ただ一度開いた口は塞がることなく、中にため込んだ思いをすべて放出した。

「そんな事が……。もっと早く気付いてあげなくちゃいけなかったのに……。ごめん、アリス」

話を聞いた後、メアリは頭を下げた。謝らなければいけないのは、私の方なのに。

「私……友達失格だね」

「何言ってるの？ 私が一人で抱え込んでいたんだから、私が悪いの。メアリに相談もせず心配ばかりかけて……。私こそ友達失格だよ……」

「……………」

しばらく沈黙が続いた。お互いなんとなく話しかけづらくなっていた。でも時間が経つにつれて、そんなわだかまりも少しずつ消えていった。

すべてのわだかまりが消えた時、不思議と二人の顔に笑みがこぼれた。

「ごめんね」

「私の方こそ……ごめんなさい」

お互い頭を下げ合って、長い沈黙は終わりを告げた。

「アリスにとって、そのメイフォルト君は特別な人なんだね？」

メアリが先に口を開いた。

「私にとってアリスやヤツクル、カルロスにマルダは特別な人……だけど、たぶんそれ以上なんだよ　きっと」

「特別？」

「そう。私もカルロスやマルダが死んじゃうかもしれないって考え

たら、同じように不安な気持ちになると思うの。……けど、今のアリスみたいになれない。自分自身をそこまで追いやる事なんてできないと思う。だからアリスにとって、メイフォルト君はとても特別な人」

私はただ頷きながら、メアリの話を聞いた。

「私は経験した事がないけど、たぶんそれって恋しているんじゃないかな？ お母さんが話してくれていたんだけどね、人は恋をする」と周りの事が見えなくなるって　それで、その人の事を想いすぎるあまり辛くなる時が来るって　今のアリスって、それと同じような気がする」

「恋……」

私は恋なんてしたことがなかった。確かに私にとってメイフォルトは何でも話せる存在。それだけじゃなくて、私の憧れでもある。

その気持ちがいっしか変わってしまったの？

……気付かなかった。顔も知らないけど、手紙だけのつながりだけど、それでもメイフォルトの事を好きになっていたなんて

「アリスと同じように彼もアリスの事を想っているかもしれない。だって、病気で倒れているときに、アリスの事を思って“大丈夫”なんて言葉言えないよ。一番つらいはずの自分よりも、心配してくれるアリスの事を考えているんだから……」

メアリの言葉は、私の心にそっと染みていった。

「大切なんだよね、メイフォルト君の事。ならさ、こんなところで暗い顔なんてしていいの？ アリスまで倒れちゃったらきつと悲しむと思う。それに何もしないでいるなんてアリスらしくないよ！」
私の心から暗い闇が少しずつ消えていく。

今の私はただ奇跡を信じているだけの弱虫だ。何もせずに、ただ悲しんでばかり。

彼と会う前のアリス……いやそれよりも悪い。

ただ未来を待っただけなんてイヤ。未来を変えるために何かしなくちゃ。

私は心の重りが少し軽くなるのを感じた。今まで胸にため込んでいたものが、ずっと消えていく。

「さっきよりもいい顔してる。辛いだろうけど……私は応援してるからね!」

そういうメアリは目を赤くしながらも、満面の笑みを見せてくれた。

8・微かな希望

夕食を済ませて部屋に戻ると、メイが窓を叩いていた。

「ごめんねメイ、いろいろ心配かけて。でも、これからは大丈夫だから」

メイは首を傾げながらも、うなずいてくれた。

私は机に向かいながら、これからどうするべきかを考えた。正直いい考えは浮かんでこない。

本当は会いに行きたい。

……けど、会ってどうすればいいの？

励ますの？ 励まして彼は喜んでくれるの？

同情されたと思って怒ったりしない？

それに辛そうにしている彼を前にして声をかけられるの？

いろいろな考えが頭の中をよぎっていく。終点の見えない論理の渦を、私はひたすらもがいていた。

静まり返った部屋に、突然ノックする音が響き渡った。

ゆっくりと開くドアの向こうに、父の姿があった。

「アリス、ちょっと話したい事があるんだが……いいか？」

「……うん」

父はゆっくりとした動作で私の部屋に入ってくる。父から話をしてくるなんて久しぶりだから、ちよつと戸惑ってしまう。

父はベッドに腰をおろして、椅子に座る私と向かい合った。

「この前おまえが話していた事なんだが……」

心当たりのない言葉。私は自分が何を話したのか必死に思い出そうと、記憶の糸を思いつきり引っ張った。

「マルス・ファアレットというお店の事だ」

「……………あ！」

忘れていた記憶が蘇ってきた。

2カ月前、私は父に頼みごとをしていた。“マルス・ファアレット”というお店がこの街に存在していたかどうか、という事だったと思う。

「それがどうしたの？」

私は父に問いかけた。

「いや……………調べてみたんだ。マルス・ファアレットというお店は、確かに存在したよ。随分昔の話になる……………600年以上も前の事だ。工芸品を扱った店は確かにその名前で存在していた」

私は驚きを隠せなかった。

あの紳士が言っていた話は本当だった。しかも600年以上も前に……………。

「アリスは、どうしてそんな昔のお店について知りたがっているんだ？ それよりも600年以上も前に存在したお店をなぜ知っているんだ？」

「ええつと……………前にある人からそういう話を聞いたことがあって、それだけなの！」

私は慌てて答えた。

「そうか……………。それだけならいいんだが……………」

父は険しい顔をして、言葉を濁した。

「何かあるの？」

「いや。実はな、その店の品は普通のものと違っていたらしくて……………特殊な力を秘めたものを扱っていたらしいんだ。魔法みたいな。もしかしたらアリスが変な事に巻き込まれているのではないか、と思つてな……………」

「そんなことないから安心して」

私は明るい顔をして、父の不安を晴らすとした。

話を終えると、父は部屋から出て行った。部屋を出るまで、父は心配そうな顔をしていた。

父が出た後、私は一人になった部屋の中で動揺していた。

あの話が本当だったこと。そして、魔法みたいな力のこと。

よく考えてみたら、あの人の瞳は不思議な感じを持っていた。布の隙間から見えた瞳は緑色をしていて、しかも瞳から零れるように光を放っていた。胸が暖かくなるような淡い光を……。服装の不自然さも、魔法を使う者なら考えられくない。いや、魔法を使う者なら普通に暮らす私たちとどこか違っていることは普通なのかもしれない。

紳士と魔法が結びついていく。そして、私の中で希望の光が生まれた。

未知の力だけど……

もしかしたら彼を救う事ができるかもしれない！

そう考えたら、居ても立っても居られない気持ちになった。

もう一度あの人に会う必要がある。

私の中でやるべきことが決まった。

深夜、両親が寝静まる頃。私はそのときを今か今かと待っていた。家の電気が消えてから1時間、私は音を立てないようにして部屋

から出た。階段降りるとき、ギイ……ギイ……と板がしなりだす。できる限り音を立てないよう慎重に足を運んだ。階段を降りて、家のドアの前まで進んできた。……まだ誰も気づいていない。

私はそつとドアを開け、外の世界へと飛び出した。

夜風が私の体を冷やす。そこで緊張が一瞬途切れた。

月明かりの淡い光に包まれた外の世界。いつも見ている街並みとは違う光景が、目の前に広がっていた。

鮮やかなレンガの建物を夜の空気が包み、華やかさをすべて消している。月光が当たる部分には、いつもの赤・オレンジ・茶色といった色彩がなく、白に近い淡い色をしていた。普段汚れが目立つ場所には黒い色に塗りつぶされ、そこが汚い所だとは決して思う事はない。

夜が見せるもう一つの街の姿。私はその中へ足を踏み入れていった。

レンガを敷き詰めた道を、私の足音だけが進んでいく。目的の場所を持たない足は、道の続く限り一步を踏み出す。

私を見ているのはお月さまだけ。

月明かりのスポットライトに照らされて、私は靴で音を奏でた。

過ぎていく景色を見ながら歩く。

カルロスの家、マルダの店、メアリの屋敷、街の役所……。気づけば、あのペットカルロスの家まで来ていた。周りは音を失ったように静まり返っていて、どうやらペットもお休みのようである。

サツと風が吹き抜ける。さっきまで明るかった道が、暗闇に包まれた。真つ暗闇の中ひとりぼっちにさせられた私。……すこし怖くなった。

恐怖に怯みそうな体を動かして、闇の中をまた歩き始める。

会えるかどうかなんてわからない。会えない可能性の方が高い。だって2カ月前の出来事で、それ以来目撃されていないのだから……。でも、今私にできる事はやっておきたかった。

心の中で“もう一度会わせて”と願いながら、私は足音を響かせた。

タン、タン、タン……

タン、タン、タン……

タタン、タタン、タタン……

「！」

突然足音が変わった。私は足を止めて、その場に立ち止った。

タン、タン、タン……

私の他に誰かが歩いている。良く聞くと、足音の中にカツンという音が混ざっている。

もしかして。

耳だけを頼りに、その足音へ向って歩みだした。

暗い道の先から誰かが歩いてくる。手には棒みたいなものを持っていて、頭に何かかぶっている。立ち止まっている私に、その人物はゆっくり歩み寄ってくる。

2人以外誰もいない通り。そこを夜風が通り抜ける。

次の瞬間、月が雲間から顔を出した。先程まで闇に包まれていた通りに月明かりが差し込んでくる。光は私の方からその人物の方へ、次第に範囲を広げていった。

光の中にたたずむ私。目の前には、あの人がいた。

9・月明かりのもとで

月明かりの下、白いタキシードに身を包み、シルクハットで頭を隠す紳士の姿があった。革の手袋と革の靴、手には宝玉のついたステッキを持っている。顔を布で覆い隠し、隙間から緑色の輝く瞳が私の方へと向けられている。

探していた人。本当に会えるなんて思っていなかったけど……。

彼は私の方へゆつくりと歩み寄ってきた。

「こんばんは、お嬢さん。またお会いしましたね」

紳士の澄んだ声が通りに響く。

「こんばんは」

私は岩のように身を固くして、ぎこちなくお辞儀をした。

「こんな暗い道を一人で歩いているのは危険だよ」

やさしい口調で彼は微笑んだ。

「実は……あなたの事を探していたんです」

「私の事を？ それはどういうことかな？」

「前にマルス・ファアレットというお店を探してらしたでしょ？」

そのことについてお話があつて――

「そうか……何かわかった事があつたようだね。お話を聞きましょう」

私は一呼吸おいて話を続けた。

「昔この土地にそのお店がありました。確かにマルス・ファアレットという工芸品を扱うお店です。今から600年以上も前の話ですが……」

「そうでしたか……」

彼は残念そうに声を漏らした。

「そのお店は“特別な力”を秘めた物を扱っていたと聞きます。あ

あなたはどうしてそのお店を探しているのですか？」

一瞬、彼が驚いたように見えた。けれど、すぐさま冷静さを取り戻し、やさしい口調で言葉を返した。

「あなたはこういったお店がご存じなんだね？ ……わかりました。私がお店を探している理由について教えましょう」

そういうと、彼は真剣な表情で語り始めた。

「私はバロン。本当の名前ではないのだが、皆にはそう呼ばれている。私は自分の記憶をほとんど失っていて、残っている記憶を頼りにこの街へ来たのだ。記憶の中にある マルス・ファレットという店を頼りにね。きっと私にとっては大切な場所だったのだろうが、まさか600年も前の事だとは思ひもしなかった……」

彼の声はどこか悲しげだった。

「お嬢さんのおっしゃる通り、マルス・ファレットは特殊なものを扱っていた。今では考えられないだろうが、魔法を秘めたものだ。当時はそれほど珍しいことではなかった。そこら中に魔法があったからね。人々に愛され、暖かな人のぬくもりがそのお店にはあった

思い出の中の話だよ」

「……そうですか」

やっぱりこの人は魔法と繋がりがあった。私の中で微かに光っていたモノが、力強く輝きを放ち始めた。

「もしも見つける事ができるのであれば、私がどういうものなのか詳しい事がわかるかと思っていたのだが、残念だ……。まあ魔法自体の存在がなくなってしまうたこの街を見て、だいたいの予想はしていたが……」

「あの！」

「ん？」

「あなたは……魔法が使えるのですか？」

私は率直な意見をぶつけた。

「そうだね……。魔法と呼べるかどうかわからないが、同じような力を使うことはできる。それに、私が生きていること自体が魔法と

「言えるかもしれないね」

私には彼の言った言葉の意味がわからない。

彼が生きていることが魔法とは？

「どういことですか？」

「あはは。そういえばまだ顔を隠したままだったね……失礼。ここまで話した事だから、お嬢さんには私の顔をお見せしよう」

彼はシルクハットを脱ぐと、顔を覆った包帯をほどいていった。

シルシルと包帯は地面に落ちていく。彼の顔が少しずつ明らかになっていった。

頭からちょこんと飛び出た尖った耳、緑色に輝く目、すつと突き出ている鼻。鼻の横、頬の部分からは長く銀色をした髭が伸びている。口元は凛々しく、気品を感じさせる。顔全体を黄色い産毛が覆っていて、光を浴びて黄金色に輝いていた。

月明かりに照らされた顔。

それは人の顔ではなかった。……そこには猫とよばれる動物の顔があった。

私は思わず息をのんだ。

今まで話をしていた紳士が、まさか猫だったとは思わなかったから……。それと、月明かりにたたずむその姿がまるで夢の中に出てくるような神秘的な光景だったから……。

一度だけ紳士の服装をした人に会ったことがあるが、その人よりもこの人の方が紳士らしく思えた。凛々しくて優しくて……それで

いて、力強さを感じさせる。

バロンの姿に、一瞬私の心は奪われた。

「改めまして私がバロンです、お嬢さん」
帽子を右手に持ち、お辞儀をしてくる。

「私はアリスです、バロンさん」

私も頭を下げて、初対面の挨拶をした。

10・旅へのチケット

お互い名乗ったところで、私は話を切り出した。

「あの　バロンさん！」

「私のことは、バロンとだけ呼んでくれないか。“さん”を付けられることに慣れてなくてね」

「それなら私の事もアリスと呼んでください。お嬢さんなんて、呼ばれ慣れてないから……。それで、バロン。あなたの使える魔法について聞いてもいい？」

「それは別に構わないよ」

私は一つ息を吐き出して、バロンの方を見た。

「今……私の大切な人が病気で苦しんでいるの。でも、その病気は珍しいモノで治療法が見つかっていない。魔法には不思議な力がある、そうでしょ？　もしかして――」

「残念だが、私の力ではそこまでの事はできないのだよ。期待を持たせたみたいで悪いね」

期待していなかったわけではないが、それでも落胆するところがあった。バロンのやさしい声はそんな私をなだめた。

バロンはきつとやさしい人。会って間もないが、そういった雰囲気漂わせている。

私はその優しさに甘えて、言葉を続けた。

「それなら……私をあなたと一緒に連れて行って！」

「……。それはどうしてかな？」

バロンは急に険しい顔をした。

「あなたは自分を探す旅をしているのでしょ？　もしかするとその途中に私の見つけたいものがあるかもしれないから――」

魔法が使えるということは、その記憶には魔法についての事柄が絡んでくる可能性がある、私はそう思った。

「言っておくがアリス、私の旅は記憶を探すことだ。決して魔法を見つける事ではないのだよ。それに　君が思っている以上に、私の旅には危険が伴う」

「わかつている！　でも……バロンと一緒にに行けば見つかる気がするの。たぶん私ひとりじゃ何もできない……。だからあなたの力を貸してほしい！」

一歩も引く気はなかった。彼の眼から視線をそらさず、じっと見つめた。

彼の強い視線が私を襲う。けど、目を背けるようなことはしない。逆に視線を打ち返すよう、私は目に力を入れた。

「なるほど。どうやらあきらめる気はないようだな。……わかった。ただし、今すぐ一緒に連れてはいけない。家族には内緒で出てきたのであるう。何も持たずに旅に出ようとするとところを見ると、ずいぶんと急な申し出みたいだな」

確かにそうだった。今日私はバロンを探していただけだった。

「明後日の夜、迎えに来よう。その間、旅に出るかどうかももう一度よく考えてみるといい。もし行くのであれば、そのときまでに旅の準備を整いておいてくれ」

「　本当に来てくれる？」

「ああ。こう見えて私は約束を破ったことがないから、安心して待っているといい」

そういうとバロンは身体を翻して、夜の闇に消えていった。

翌日、私は旅の準備を始めた。

大きな荷物では邪魔になるだけから、必要なものを最小限に抑えて、手持ちのバッグに詰め込んでいく。衣類に食料、あと……何か

あつた時のために薬や包帯など。

荷造りは、意外と早い時間で済ませることができた。あとは、どうやって家を出るか理由を考えるだけ……。

夕日が沈む少し前の時間帯。

私はメアリと近くの喫茶店にいた。アイステイーを口に運びながら私は、メアリに旅へ出るための相談を持ちかけていた。

「旅に出るって　どうして？」

驚くメア리를他所に話を進めた。

「実は昨日ね……」

私は昨日の出来事はメアリに話した。メアリは呆氣にとられた感じで、一言も口を挟まず話を聞いていた。

「それで……親にどう言えいいのか考えてはいるんだけど、いい考えが思い浮かばなくて」

「……ごめん。あまりに現実離れた話で、うまく整理できてないんだけど」

「ううん、いいの。とりあえずは旅に出る理由を考えてほしいだけだから」

氷が入ったグラスをストローでひと掻きし、乾いた口にアイステイーを流し込む。メアリは目の前のグラスに手をつけることなく、真剣な面持ちでじっとテーブルを見つめていた。

頭の整理がついたのか、メアリがゆっくり顔をあげた。

「アリス、本気でそのバロンと旅に行く気なの？　素性もわからない相手なのよ。それに人じゃないし……魔法なんてわからない力を持っている。私は旅に出る事に……賛成できない」

メアリの顔は本気だった。

「でも……メイフォルトを救う何かが見つかるかもしれない。確かにバロンは不思議な人。ついていくことが怖くないわけじゃない。

旅だってどんな危険があるかなんてわからないし、何が起こるかなんて想像もつかない」

「それなら」

「メアリ！ それでも私は旅に出るって決めたの。覚悟は……している」

「……………」

「……………」

メアリの鋭い視線が私を捕らえて離さない。同様に、私もメアリから一瞬も目を離さなかった。

「アリスの……意地っ張り……………」

「ごめんね、メアリ」

メアリは納得いかない様子だけど、私の事をわかってくれた。

メアリは汗を流すグラスを手にとって、口をつけた。アイスティーはストローを通して、メアリの中へ。色のついた液体がグラスの中を下降していき、見る見るうちに底へとたどり着く。

ふう〜と息を吐いたメアリは、落ち着いた様子でこっちを見た。

「危ない旅だったら途中で帰ってきてね。アリスが危険な目に遭っているなんて考えたら、不安で不安でしょうがないから……………」

「うん。約束する」

「それと 私の事忘れないでね。私だけじゃなくて家族の事やカルロス、マルダの事も。みんなアリスの事大切に思っているんだから」

「うん！」

そして、メアリは私が家を離れる理由に手を貸してくれた。

レアドールから遠く離れたところに、メアリはもうひとつの家を持っている。その家に私とメアリ2人だけで旅行することにした。最長で1カ月の長旅。メアリはその家へ、私はバロンと旅へ。

私が旅から戻ってきたら一番に会いに行くこと。怪我なんて絶対しないこと。いつも帰りを待つ人々のことを考えること。それら全ての事を承諾して、私は嘘の理由を手に入れた。

「メアリ、ありがとう」

「ううん。元気に戻ってきたら許してあげる」

心配してくれているメアリの言葉は心強かった。すべてを成し遂げて、絶対戻ってくる。私はそう決心した。

夕食の時間に、明日からメアリと旅行に行く事を話した。突然の話だったが、両親は『メアリさんが一緒なら』と許してくれた。

就寝前、私は手紙を書いた。どうしても伝えておきたい事があったから……。

手紙を書き終わると、明かりを落としてそのままベッドに潜り込んだ。メイに“おやすみ”と言い、私は瞼を閉じた。

11・旅立ち

次の日、私は昼過ぎに家を出た。家を出た後メアリと合流して、隣町への交通手段として用いられる駅へと向かった。

駅のホーム。ベンチに腰をおろした私は、メアリと最後の会話をした。蒸気を吹き上げながら近づいてくる汽車が、別れの時間を知らせる。汽車がホームを出る直前、メアリは私に『がんばってね！』とエールを送ってくれた。

メアリを乗せて、汽車は走りだす。

私はメアリに『ありがとう』と叫びながら、姿が見えなくなるまで手を振り続けた。汽車の去ったホームには、汽笛の音がこだまし続けていた。

空に星が瞬きだす頃、私は街外れの草原にいた。少し高台となったその場所からは、街の景色を一望することができる。自分の育った街をしっかりと目に焼きつけながら、時間が経つのを待っていた。

街の明かりが一つ一つ消えていく。夜風が冷たさを増してくる。ふんわりと私の髪を巻き上げる風は、潮の匂いを運んできた。鼻をかすめたその匂いに、私の思い出が目を覚ました。

あの夏の日

イカダを完成させた私たちは、旅に出る準備を始めた。荷物には、

食料ばかりを詰め込んだ。詰められるだけ詰め込まれた大きなバッグはお腹いっぱい状態で、いつ破裂してもおかしくない様子だった。

出発当日。

波止場に向う私たちの前に、金色の短い髪を逆立てたカルロスが一人立っていた。私とヤツクルは2番目の到着らしい。カルロスの荷物も私たち同様お腹いっぱいようだ。

しばらくするとマルダがやって来た。手には、2本の釣り竿を掲げている。どうやら私たちと違って、食料は現地調達するらしいが、エサになるものは持っていない。どうやって釣るのだろうか？最後にメアリがやって来た。メアリの手に何もなかった。たぶん、みんなが必要以上の用意をしてくると踏んでのことだろう。実際の通りである。

全員が集まったところで、イカダを海へ浮かべた。イカダは私たちの思惑通り、しっかりと海に浮かんでいた。浮かんだイカダに、まずカルロスが乗り込む。続いて、ヤツクルがイカダに飛び乗った。私とメアリはそのあとで、時間をかけながら慎重にイカダへと足を乗せた。

岸に残ったマルダは、荷物をイカダに乗せていく。荷物を積み終わり、漕ぐための板をカルロスとヤツクルに渡して、最後にマルダが乗ってきた。

すべての準備は整った。永遠に続く地平線を目指して、私たちの旅は始まった。カモメが門出を祝う詩を歌い、魚の群れが私たちの旅路を先導する。この先に待つ困難や恐怖　それらを乗り越えた先にあるモノを見つめ、私の瞳は今までにない輝きを放った。冒険者の夢を乗せて、イカダが海を走り始める。

さあ、冒険の始まりだ

……そうなる予定だった。今から私たちの楽しい夏が始まる予定だった。まさかイカダが海に引きずり込まれるなんて、誰も予想だにしなかった。

しっかりと子供5人を浮かべられるように作られたイカダ。荷物もしっかり乗せられる用に作られている。私たちの誤算は、荷物が一人分以上の重さになってしまった事。子供6人以上の重さに、イカダは耐えられなかった。

最終的に浮かんだのは私たち5人と、マルダの釣り竿だけ。私たちの旅は始まった瞬間、同時に終わりを迎えた。

色々な懐かしい記憶が蘇ってきた。この街は私の思い出そのものなんだ、とその時気づいた。しばらく離れることを惜しみながら、明かりが消えていくのをその眼に焼き付けた。

街中の明かりがすべて消えたとき、草原を歩く音が聞こえてきた。「アリス、約束通り迎えに上がったよ」

月明かりのもとでバロンが佇んでいた。私は腰を上げると、大事な出発の一步を踏み出した。

「私の手につかまりなさい」

そっと差し出される左手。私はバロンの横に立ち、右手でその手をつかんだ。

「それでは行こうか。私は記憶を探す旅へ、アリスは友を助ける旅へ」

そういうと、バロンの体がやさしい光に包まれていった。

バロンの左手から温かさを感じる。それは何ともいえない、やさしい温もりだった。次第に光は彼の体から、私の右手を伝って私の体をも包んでいく。私の体を光が包んだ時、バロンは右腕を上げてステッキを空高く掲げた。

「今より空を駆ける。手を放さないことだけ考えなさい」

ステッキの宝玉が青い色に輝いた。フワツとした感覚が全身を流れる。下を見ると、足が地面から離れている。

宝玉の輝きが、更に強さを増した。

その瞬間、私の体は空高く舞い上がった。

一瞬の出来事に私は固まっていた。視点をそつと下にずらす。地上があんなに遠くにある。視点を横にずらすと、幾つもの光が集まっているところがある。隣町のハルバニアだろうか。

ゆっくりと頭の中で状況が整理されていく。今の状況を理解したとき、私はパニックに陥った。足をバタつかせて、まるで泳げない子供のような格好である。

「慌てることはない。ゆっくり体の力を抜いてやればいい」

バロンは落ち着いた様子で私を誘導してくれた。気持ちを無理やり落ち着かせて、暴れる体を押さえる。

ゆっくり、ゆっくり……。

次第に膠着した筋肉がゆるみだす。気持ちも硬さが抜けていく。余計な力が抜けたとき、浮いている感覚に慣れていた。

バロンを見ると、“もう大丈夫だよ”と微笑みを浮かべていた。バロン、これからどこに行くの？」

「リサルドという小さな村に向かうつもりだ。そこには私の家がある。今日は夜も更けているので、体調を整えて明日から本格的に旅をしようと思うが、どうかな？」

私はうなずいた。

「 それでは急ごうか」

一度身体を持ち上げられたような感じがした後、私たちは前かみになり空を駆けだした。私は育った街を背に、心の中で別れを告げた。

お父さん、お母さん、ヤツクル、メアリ、カルロス、マルダ……
今からこの街を離れ、旅に出ます。しばらくのお別れです。
でも必ず帰ってくるからね。そのときまで待っていてください。
それじゃあ……行ってきます！

12・空に浮かぶ島

流れゆく雲と行き交いながら、風と共に空を進む。月明かりを全身に浴びて夜空を舞うというのは、とても気持ちがいい。空を飛ぶのは、私にとって初めての体験。それは、蝶や鳥のように空を飛ぶというものではなく、風のように空を吹き抜ける……そんな感じだった。

眼下に広がる草原や海原を越え、いくつもの山々を通り過ぎていく。夜という事もあって、今どのあたりを飛んでいるのか検討もつかない。

しばらく行くと、目の前に大きな雲の群れが見えてきた。幾重にも層を重ねた積乱雲だ。

私たちは避ける事なく、雲の中に飛び込んだ。雲の中は視界が悪く、何も見えない。この世界では、先導するバロンだけが頼り。しっかりと手を掴み直して、視界が開けるのを待った。

雲の中を進むにつれて、周りが明るくなってきた。出口はもうすぐのようだ。

雲を突き破ると、目の前に星空が広がった。澄んだ空気の中に浮かぶ星々は、今までで一番輝いて見えた。

今いる場所は雲の上の世界。なんとも不思議な雰囲気を感じ出している。その中に、大きな黒い塊が浮かんでいる。

雲に浮かぶ島だ！

月の明かりだけではよくわからないが、その島には小さな光がいくつか灯っていて誰かが生活しているようだ。

私たちは今その島に向かって進んでいる。どうやらリサルドという村は、あの島にあるらしい。初めて目にした浮かぶ島に、これか

ら始まる冒険への期待がより一層高まった。自分の知っている世界がちつぽけなモノであることを感じる事になるんだろっ……、そう思った。

島に降り立つと、体を取り巻いていた光がいつの間にか消えていた。それと同時に、私は寒さに震え出した。雲の上に浮かぶこの島は、私の街より気温がだいぶ下がっているようだ。

私は先程まで握っていた手を、ゆっくりと離れた。すると、バロンは私の正面に立ち、一言つぶやいた。

「ようこそ、アリス。リサルド村へ」

リサルド村は、島の端から少し歩いたところに位置していた。緑に包まれた島にあるその村は、生活の場として利用される場所以外は自然をそのまま残しており、多くの木々が空へのびのびと背伸びをしている。歩いている道は砂利で舗装されていて、歩くとジャリ、ジャリという音を立てた。道の脇は草木が生い茂り、私の背丈くらいまで伸びていた。

真っ直ぐ延びる道を歩いていくと、途中右側に曲がれる所があり、その先には球体をしたものが見えた。まるでボールが半分土に埋められているような物体。これがリサルド村独特の家の形らしい。球体の端つこには、筒状のものがチョコンと顔を出し白い煙を吐いている。おそらく煙突だと思う。家の高さは私の身長より少し高いくらいだろうか。さつき歩いてきた道からでは草が邪魔をして、そこに家がある事がわからなかった。

私たちは右に曲がらずに、そのまま真っすぐ進んだ。途中で左に

折れて進んでいくと、その先に1軒の家が見えてきた。ここが
バロンの家。

バロンは右手で扉を押さえて、私を中に招いてくれた。

家の中に入ると、そこには大きな空間が広がっていた。外観からは決して想像できない広さだ。私が先ほど家だと思っていたものは、どうやら屋根の部分らしい。この村の家は地面を掘り起こして作った大きな穴の上に、ドーム型の屋根を取り付けることで造られている。地肌はすべて板で隠されていて、地中にあることを感じさせない。

初めて見る家に、私は感動していた。

「ここが私の家だ。歓迎するよ、アリス」

バロンはニツコリと笑っていた。

階段を下りて、1階に当たる場所へと案内された。中央に楕円型の大きなテーブルと椅子が4脚、壁際には本棚やタンスが置かれている。バロンは中央のテーブルに行き、椅子を引いて待っている。私は指定された椅子に腰をおろした。

「外は寒かっただろうから、何か温かいものでも用意しよう。何が
いいかな？」

「えーと、ミルクをお願い」

「わかった」

バロンは部屋の奥にあるキッチンに歩いて行った。キッチンはこの部屋で唯一レンガを使用して造られた場所で、火事が起こらないよう壁まで設けてある。キッチンの上には煙突があり、伝っていくと地上まで伸びていた。

部屋を見渡すと、他にもいろいろなものが目に映った。

床の上に敷かれた真っ赤な絨毯

鮮やかな色合いが高級感を漂

わせている。壁にかかっている絵画　人で溢れかえった通りに色々なお店が並び、空には無数の風船が浮かんでいて陽気な雰囲気を感じさせる。どこかのパレード風景だろうか……。部屋の隅に設置された本棚　隙間なくキッチリと本が並べられていて、むずかしいタイトルの物から私でも知っている知名度の高い物まで幅広いジャンルの本が納まっている。壁に建てつけられた梯子　私から見えて前と後ろに1つずつある。それぞれロフトのような空間につながっているみたいだけど、ここからではその空間にどんな物が置いているか確認はできない。

色々なものを観察していく中で、この部屋がきれいに整理されている事に気づいた。よく見れば、チリやほこりも落ちてない。部屋を見ただけで、バロンの性格が読み取れてしまう。私はクスッと笑ってしまった。

「どうぞ」

湯気を立てるコップの一つが、私に差し出された。バロンは珈琲の香りを漂わせているコップを抱えて、私とは向かい側の席に座った。

「お味はどうか？　地上の物とここの物ではすこし味が異なるから心配しているのだが……」

「うん、おいしい」

「それは良かった」

冷えた体をミルクがゆっくり温めていく。なんだかホッとため息をつきたい気分だ。

飲み終わるとバロンはコップを掲げて、キッチンへ向かった。そして片付けが済むと、すぐにこっちへ戻ってきた。

「アリス、体の調子はどうだい？」

「ん？　大丈夫だけど……」

「ふむ。空を飛んだのは初めてだろうから少し心配していたのだが、

異常はないようだな　安心したよ。ただ気づいていないだけで体は疲れているかもしれない。ここも慣れない環境だから、今日は早めに休むと良い」

「うん」

「後ろの梯子を登ったところにベッドがあるから、そこを使ってくれ」

「わかった。ありがとう、バロン」

私は立ち上がって、後ろにある梯子に手を伸ばした。

梯子を登った先には、小さなテーブルとベッドがあった。味気ない部屋だが、客間としては申し分ない設備である。

私はバロンの方に振り返って『おやすみ』といい、ベッドに向かった。

「アリス、おやすみ」

バロンの声を聞きながらベッドに入った私は、スッと眠りに落ちていった。

13・記憶の始まり

目が覚めると、パンの焼けたいい香りがしてきた。久しぶりにぐっすり寝ていたためか、体がいつもより軽く感じる。私はいつもどおり起き上がろうとする。しかし、何か……違和感がする。

あれ？ 窓から差し込んでくる光が……ない。

よく見ると、見慣れない天井。窓はなく、その代りに天井に小さな穴があいている。部屋を見渡すと、隅に本棚があり、近くには小さなテーブルが置いてある。テーブルの上には私のバッグがある。状況を整理して、しばらく考えた。

あ、そうだった！ ここはバロンの家だ。

私は、自分が今どこで何をしているのかを思い出した。

起きたばかりで強張っている体を、ゆっくり背伸びして筋肉をほぐしてあげる。その後、ベッドから降りた私は着替えに取り掛かった。バッグから白いコートとドレス風の赤いワンピースを取り出す。身支度が済むと、1階へ繋がる梯子に手をかけた。

「おはよう、アリス」

料理をしながらバロンが声をかけてきた。

「おはよう、バロン」

私は1階へ降りると、キッチンに向かった。

「ゆっくり休むことは出来たかな？」

バロンが柔らかい表情で問いかけてくる。

「うん。疲れてみたいで、ちょっと寝過ぎちゃったかも」

「ははは。それを聞いて安心したよ」

「何か手伝うことはある？」

「そうだな……それならそこに置いてあるミルクをテーブルまで運んでくれないか？」

「うん。わかった」

慣れた手つきで料理をするバロン。その手際の良さから、毎日料理をしていることが窺える。私は床に置いてあるミルクの入った容器を持って、テーブルへと歩き出した。テーブルには焼けたてのパンとサラダが並べられ、トッピングに5種類のジャムが添えてあった。

バロンの作ったスープがテーブルの置かれると、朝食の準備は完了した。よく眠れたせいかな、お腹はペコペコだった。食事中、口をリスのように頬張らせながら食べる私を見て、『そんなに慌てなくてもよいのだよ。時間はゆっくりあるのだから』とバロンは言った。

20分ほどでテーブルに置かれたすべての皿は空となった。いっぱいになったお腹では、今すぐ動けそうにない。遠慮せず黙々と食べていた私は、食後椅子から動けずに座ったままの状態で過ごしていた。

「バロン」

後片付けをしている彼に呼びかける。

「今日はどこに行くの？」

「そうだな……。はつきりと決めてるわけではないが、工芸の都アルアタシスに行こうかと考えている」

「そっかぁ。マルス・ファアレットって工芸品のお店だったわね。そこなら何か見つかるかもしれない」

目的地となる場所を聞いて、旅への実感がわいてきた。

食事をして2時間くらいが経った後、私たちはバロンの家を出発

した。

Baron の家を出てしばらく歩いていくと、道の先から 1 人の女性が歩いてきた。

「あら Baron、こんにちは。今日もお出かけ？」

「こんにちは、レミアさん。天気もいいようなので、少し遠くまで行こうかと」

簡単なあいさつを交わす Baron。

レミアさんと呼ばれる女性は、私たちと同じように人の顔をしていた。背格好も同じだ。

てつきりこの村の人は Baron と同じような人達なんだろうと思ってしたが、違ったようだ。

「そちらにいるお嬢さんは？」

「あ、はじめまして。私は Baron の友人でアリスと言います」

「かわいらしいお嬢さんね。よろしく」

会釈を済ませて、私たちはレミアさんと別れた。

「ねえ、Baron」

「ん？」

「Baron は昔からこの村で暮らしているのよね？」

「そうだな。記憶をなくしているからはつきりと言えないが、私の覚えている限りではそういうことになるね」

「この村の人で、Baron と同じような人はいるの？」

「　　という？」

「さっき会ったレミアさんの外見は私たちと同じ人間だったでしょ。Baron は人間のように話をしたり 2 本の足で歩いたりできるけど、見た目はネコの姿をしている。もしかしたら同じような人がいるのかなって思ったの？」

「……なるほど。この村に私と同じような人はいないよ。残念だが、私以外はアリスと同じ人間だ」

「けど、みんなあなたを見て驚かないでしょ？」

「そうだな。この村の人達は、いろんな事象を柔軟に受け入れる事が出来るのだろう。最初は皆驚いていたが、すぐに私の事を受け入れてくれたからな。アリスと同じさ」

そう言くと、バロンは何か懐かしむような表情を浮かべた。

ザク、ザク、ザク……

何かの音が近づいてくる。その音に私の体は反応した。

ゆっくり呼吸を始める体。口が開き、吸い込んだ空気が、体の中に染みこんでいく。体に温かいものが流れ出す。流れ出したものは体の隅々まで行き渡ると、そこから体の中心へと戻ってきた。開けた口からは、先ほど吸い込んだ空気が外へと放たれていた。

瞼がゆっくりと上がっていく。暗闇だった世界に光が差し込んでくる。光の中から現れたのは、無数の木々と地面を覆う落ち葉だった。

私は今、木の幹に体を預ける形で座っているようだ。ぼーっとした頭の中を、先ほどの音が音量を上げて響き渡っている。

私は首を回して、音のする方を見た。

音が止む。

すると、誰かの話声が聞こえてきた。

「あれは何だ？」

「さあ、あ、今まであんな人あつた事がないからな。服は着てるみたいだが」

「ホントだ。何かえらい人が着てるような高そうなものだな」

私の瞳に、指をさす男の姿が2つ映る。

「あの……」

「おい、今しゃべったぞ!」
「言葉は通じるみたいだな……。おい、あんたそこで何をしてるんだ?」

私はここで何をしていたのだろうか?

思い出そうとしてみたが、何も出てこなかった。私がここで何をしていたのか……。わからない。わからないというより記憶にないと言った方がいいだろうか。先ほど目を覚ましてから今までの記憶以外、私には残っていないようだ。

「申し訳ないが、私にもわからない」

2人の男はお互いの顔を見合せた。

「どういう事だ? クロン……。わかるか?」

「いや、おれにも」

しばらく困惑した顔で話し合った後、もう一度こっちを振り向いた。

「あんた名前は何というんだ?」

「私の名前は……。申し訳ない。やっぱりわからない」

「わからないってあんたの名前だぞ。そんなことあるわけ」

「いや、わからないというより思い出せないと言った方がいいのか

……」

「思い出せないのかい? それはまた難儀な……。体の方は大丈夫かい?」

私はゆっくりと体を起こした。

「体の方は どうやら大丈夫みたいだ」

「そうかそうか。で、これからどうするつもりなんだ? どこか行くところでもあるのか?」

「いや……。さつき目を覚ましたばかりで……」

「なあ、イアン。この人を森の外まで案内してあげないか? たぶんここがどこだかもわかってないと思うぜ。どうせ、おれたちも村

へ帰る予定だしよ」

「そうだな。それなら、一度私たちの村に寄ってもらうといい。この人困っているみたいだし、何かの助けになるかもしれないからな」
「気前がいいのだろう。2人は私を村に案内してくれるそうだ。私は2人の心遣いに感謝し、一緒についていく事にした。」

2人の後を追うようにして森を抜ける。森を出た時、大きな木々に遮られて見えなかった空が広がった。オレンジ色と朱色が混ざり合ったような、それはそれは美しい夕焼けの空だった。

2人に連れられて、道なりにしばらく歩いていくと1軒の家が見えてきた。家の前まで来るとイアンは『ここで待つように』と言い残して、家の中に入ってしまった。しばらくして出てきたイアンは、
「さあ家の中へ」

と、私に声をかけた。家のドアに手をかける。振り返ると、2人はただ黙ってこつちを見ていた。

「あなた方は中へ入られないのか？」

「ああ。私たちはここで帰るが、安心してください。村長はやさしい人だから、必ずあんたの助けになるよ」

「……色々と親切にしてもらって、2人とも本当にありがとう」

「なあくに気にしなさんな。困っている人を助けるのは当たり前だからな。今度はあんたに助けてもらうさ」

そういつて笑いながら、私を見送った。

家の中に入ると、暖かな空気が私を包んだ。この家は地面を掘ってできているため、外よりも気温が高くなっている。部屋を照らすランプのオレンジ色をした光がまた、温かな色をしていてより一層身体を温めた。

一階へと続く階段を降りると、一人の老人が椅子に腰をかけていた。

「ようこそ、私は村長のネイルという者です」

老人は腰を上げて、言葉を発した。

「はじめまして」

私も頭を下げながら言葉を返した。

「イアンの話だと、あなたは記憶を失っているそうですね。何か思い出したことなどはないのですかな？」

「残念ながら何一つ思い出せないままで……」

「そうですね。何か手掛かりになるものがあればよいのですがね。あなたの洋服に、手掛かりになるようなものは残ってないのですかな？」

そう言われて、ポケットの中を探った。

まずはズボン。右ポケットには、何もない。左ポケットには……やっぱり何もなかった。上着の方も調べてみたが、結局何も出てこなかった。

「何の手掛かりもないようですね……」

「そうみたいです」

村長は私をじつと見つめて、何か考えているようだった。

「ふむ。ということは、行く宛ても……帰るところもないということ事ですね」

「はい。そういうことになります」

「見た感じ……あなたは悪い人ではないようだ、服装もしっかりしてらっしゃる。外見は……少し変わっていますがね。もしあなたが望むのであれば、住む家くらいはこの村に用意できますが、どうですかね？」

私はしばらく考えた。だが、行く宛ても帰る場所もない私に残された答えは一つだった。

「申し訳ない。しばらくの間、厄介にならせていただく事にします」私の返事に、ネイルの顔が僅かに緩んだ。私たちは“これからよろしく”という意味を込めて握手を交わした。

話が終わった後、ネイルは村の人たちを集めた。そのなかにはイアンとクロンの姿もあった。何が始まるのかという不安からか、辺りはシーンと静まり返っている。

ネイルに連れられて、私は皆の前に立たされた。村人のほとんどは目を丸くして私を見ている。おかしい容姿をした私に対して、何かを感じているようだった。

「みな集まっておるな」

ネイルの声が広場に響く。

「今日から村で暮らす者が1人増えることになった」
そういつて私の方を向いた。

「彼の名前は バロン。初めの内は慣れない暮らしに戸惑うだろうから、みんなで助けてやってくれ」

村長からの紹介を受けた私を、村人は不審に思いながらも拍手で迎えた。

バロン それが私の名前である。生活する上で名前がないのは不便だろうと、ネイルと私で考えた名前である。名前の由来は、ある小説の登場人物。私の服装が小説内にでくるとその人物に類似していた事から、名前を頂く事になった。初めは“バロン”という名に違和感を覚えたが、今では結構気に入っている。

「はじめまして、バロンと言います。皆さんには迷惑をかけると思います。ですが、どうぞよろしくお願いします」

私は初めて自分の名前を呼び、村人へのあいさつをした。先ほどよりも盛大に贈られる拍手を受けながら、バロンとしての生活は始まった。

14・工芸の都アルアタシス

バロンの家から随分と歩いてきた。視界には島の終わりが映っている。

「ここら辺が、昨日降り立った場所かな？」

バロンが足を止めて、こっちを振り向いた。そして、そつと手を握ってきた。

「要領は昨日と同じだ。慌てる必要はない。私の動作を見て、真似るといい」

昨日の感覚がよみがえってくる。

空を駆け、風を切る感覚。

昨日は周りが暗かったため景色をじっくりと眺める事が出来なかったが、今は太陽が高々と上っている。きっと空からの景色は素敵なんだろう、期待に胸が膨らんだ。

「行くぞ」

掛け声と共に、二つの光が舞い上がった。限りなく澄み切っている空に2つの光が線を描きながら、遙か彼方へと飛び立っていった。

空が澄み切っているため、遠くの方までよく見える。視界いつぱいに広がった光景は、想像していたよりも素敵なものだった。

緑色をしたキャンパスに、細い水色の線が模様を描いている。所々肌色に塗りつぶされた部分も見受けられ、壮大な絵画にアクセントをつけていた。きれいに緑を切り取った所からは、賑やかな音が聞こえてくる。鮮やかな色を取り入れたその場所には、他とは違った美しさがあった。

吹き抜ける風と照らし続ける太陽の光。今日は過ごしやすい日に

なりそうだと、私は思った。

2つの山を越えたとき、2つの光はゆっくり下降を始めた。目的地まで、もう少しのようだ。しばらくすると、私たちの前方に大きな街が見えてきた。2つの光はその街の手前にある森の中へと降り立った。

着陸した場所は、大きな幹をもった木々がひしめき合い、その中でエメラルドグリーンの色をした水が輝きを放つ、静かな湖のほとりだった。空を覆うほどに伸びた枝。その枝の隙間から光が差し込んでいて、辺りを涼しい空気が包んでいる。人の関与を受けないこの場所には、人が忘れてしまった緩やかで静かな時の流れが流れていた。

私たちは地面へ足をつき、無事着地する事に成功した。地上を半日ほど離れていただけに、何力月か振りに地面を踏んでいるような感覚が襲う。空に浮かんでいた島にも地面はあるが、地上とはやっぱり違うようだ。

バロンは、降り立つとすぐに準備に取り掛かった。カバンから取り出したのは、細長い布。それを顔へと巻いていく。

なるほどね。

私は隣でバロンの準備が終わるのをじっと待っていた。

「待たせてしまったね」

顔をきれいに布で隠したバロン。その異様な佇まいは、いつ見ても私を驚かせる。顔を出すと騒ぎになるのはわかるけど、その顔もどうなんだろう？

複雑な気持ちを抱えつつ、私たちは街に向かって歩き出した。

森を抜け、田舎道を歩いて行くと、大きな門が見えてきた。門をくぐった先には、アルアタシスの街並が広がっていた。

まず目に飛び込んできたのは、延々と続く大きな通り。赤色と茶色、オレンジに黄土色と、色とりどりのレンガで舗装をされていて実に鮮やかである。そこを多くの人が行き交っていて、まるで祭りのような賑わいを見せていた。通りの脇には、店が列をなして並んでいる。レンガで出来た建物にお店を構えているところもあれば、建物の前に布の屋根を張って木製の棚に商品を陳列させているお店もあった。

工芸の都アルアタシスは、レアドールの3倍ほどの大きさがある。来たことはないが、噂だとほとんどの工芸品がここで作られているらしい。作られた工芸品が各地方へと輸送され、売られているとか。

私たちは大通りへと足を踏み入れた。人集りの中をすり抜けるようにして進んでいく。通り過ぎる人々は、バロンの姿をちらちらと見ていく。目立ってはいるが、誰も何も言わない。たぶん関わりたくないからだろうか……。とりあえず騒ぎになることがないと安心した私は、出店に並ぶ数々の工芸品を眺めながら歩いた。

さすが工芸の都。私の知らないものが所狭し並べられている。木で作られたヘンテな生き物（ドラゴン？）やきれいな石を散りばめて作られた王妃の肖像画。透明な容器に入っている帆船のレプリカは、光のあたる角度で中の水の色が変わって、子供が喜びそうな工夫が施されている。

私の瞳は真新しいものとの出会いで輝いていたに違いない。しばらく時間を忘れて、工芸品を見る事に夢中になっていた。

街の中を随分と歩いてきた時、とあるお店の前で自然と足が止まった。この街で見たものには驚かされてきたが、この店に置いてあるものはそれらとは違った不思議な印象を持たせるものだった。

「お嬢ちゃん、いらつしゃい」

店の主人が声をかけてくる。私はその声を無視して、ある物へと手を伸ばした。

「これ……」

青い色をしたきれいな石を手取る。石は青白い光を灯しては消え、また灯しては消え……と一連の動作を繰り返して続いていた。

「なかなか目の付けどころがいいね。それはね、ラピスラズリと呼ばれる石なんだ。近年では存在自体が危ぶまれていたのだが、先日偶然落ちていたのを拾ってね。不思議な石だろ？ それは600年前まで魔法の力を留めるために用いられていたらしいからね。その石にも少しだけ、力が残ってるのさ」

店の主人は自慢げに話をした。

「この石って珍しいものなんですか？」

「ああ。何て言ったって、この石を見つけたのは600年前から今までの間で、私を含めると2人しかいないからね」

そんなにすごい石なんだあ、と感心した。でも、私はこの石を見たことがある。ただ……自然に光を放っているのは、初めてだけど

「ねえ、バロン。そのステッキについている石って、これなのかも

」

私はバロンの方へ振り向いた。ステッキについている石と、手の平で光を放つ石を比べてみる。

やっぱり同じものだ。

「こりゃ……すごい。こんな大きなラピスラズリがあるとはな……」

「おじさんから見ても同じなんですね？」

「ああ　ただ光ってないところを見ると、石に力はないようだが……」

おじさんは口を開けたまま、バロンの石を見つめていた。

「申し訳ないが、ご主人。この石について他に知っていることはないか？」

今まで口を閉ざしていたバロンが訊ねる。

「悪いが……さっき話したこと以外は何も」

「そうか」

「気を落とさないでくれ。そうだな……この道を真つすぐ行くと広場がある。広場には噴水があるから、それを目印にするといい。そこから左に曲がって真つすぐ進んでいったところにルネ・モリー二というお店があるんだ。600年以上前から続いている店だから、その人なら何か知っているかもしれない」

「ありがとう。その店へ行ってみる事にするよ」

「ありがとう、おじさん」

親切にしてくれたおじさんに手を振って、私たちは笑顔で店を後にした。

さっきの話通り、進んだ先には噴水を中心に構えた広場があった。噴水の周りにはベンチがあり、歩き疲れた人々が腰をかけている。広場の左側には、進んできた道より少し狭くなった道がある。私たちはそこを休まず進み続けた。

肌色をした看板に群青色でルナ・モナー二という文字。5分ほど歩いたところに、そのお店はあった。

レンガで出来た2階建ての建物で、2階が住居になっている。1階のお店からは古びた感じせず、内装もきれいにしてあった。唯一壁に取り付けられた看板だけが、600年の歴史を醸し出していた。

お店のドアを開け、中に入る。

カウンターには、一人の青年が腰を掛けていた。まだあどけなさ

の残る顔で、この店の主人とは思えないほど若い。店の中には客人がおらず退屈しているのか、頬杖についてカウンターにうつ伏せている。

「いらつしやい。何をお探しですか？」

「すみませんが、ちよつと聞きたい事があつて……」

私はバロンの持つていたステッキを受け取り、青年の方にそのステッキを差し出した。

「このステッキについている石について、何か知っていることはないですか？」

「うゝん。ちよつと見せてもらつてもいい？」

ステッキを渡すと、青年は真剣な顔で石を観察し始めた。さっきの態度とは一変して、鋭い眼光でステッキを観察する工芸職人の姿に、私は少し驚いた。

しばらくすると、観察していた彼が固い表情を少し緩めた。

「たぶんだけど……ラピスラズリだよね？」

「ええ。その石について知っている事があつたら教えてほしいの」

私はバロンを代弁して話を進めた。

「そうだな。昔この世界の人々に不思議な力があつた頃の話だ。ラピスラズリは他の石にない特別な効果を持った石として重要視されていた。その効果とは、不思議な力を引き出す事だ。理屈はわからないが、ラピスラズリを持つことで力を使えたらしい。もう一つ不思議な力を留める効果も持つていたと聞く。まあ600年以上も前の話だけだな」

頭をかきながら、青年はステッキを私に戻した。

「だけど、そんなこと聞いてどうするんだ？」

彼の言葉で、ここにきた目的を思い出した。

「私たちレアドールという街からやってきたの。その街には600年前にマルス・ファレットというお店があつて、このステッキはそのお店の作品。とても貴重なものらしいんだけど、作った人がわからないの。もしかしたらこの街から来た人なのかも、そう思つて

調べているんだけど……」

私はでたらめを並べた。

別に考えなしにしゃべったわけではない。マルス・ファールレットが魔法を秘めた物を扱っていたのだから、このステッキがその店で売られていたと考えられない。それに、こういえばお店の人に
ついて、何か情報を掴めるかもしれないと思った。

「うん。どうだろうな？ 昔この石を使った作品を手掛けていた人はいると思うが、そんな昔の記録が残っているかどうかだよ……」。一応何かないか調べては見るけど、結構時間がかかると思うよ。また明日来てくれないか？ その時までには調べておくから」

「うん、わかった」

「あと、うちは商売をしている身だ。それなりの情報料は頂くから、用意しといてくれよ」

約束を交わした私たちは、お店を後にした。

いつの間にか外は夕焼けの色に変わっていた。

15・ヤンクロック

リサルド村に戻ってきたとき、空には月が浮かんでいた。帰り道を照らす月を見ながら、今日の事を整理していた。

バロンの持つているラピスラズリという石。600年前から見なくなったという不思議な石。バロンの記憶にあるマルス・ファールツトという店の事を考えると、やっぱりバロンは600年前から生きてきた人という事なのかな？魔法が使える事を考えると、そうとしか言いようがない。だけど600年もどうやって生きてきたのだろう。容姿が人でないからわからないけど、私たちより寿命が長いのかな？それとも時代を超えてきたとか？

わかった事があれば、そこからわからない事が出てくる。それでも今日の事は決して無駄じゃない。バロンの旅においても、私の旅においても……。

「アリス、今日はありがとう」

突然バロンがお礼を言ってきた。

「いきなりどうしたの？」

「今まで私一人で旅してきたのだが、今日のようにいろいろな情報が入ることはなかった。包帯を巻いた姿では、私の話に耳を傾けてくれる者などいないからね。だから、お礼を言いたくなった

ありがとう」

「そんな……お礼を言われるような事じゃないわ。ううん、むしろお礼を言いたいのは私の方。バロンと出会ったおかげで、今まで知らなかった事を知ることができたもの。きっとこれからもそういった出会いがたくさんあるはず。だから、お礼なんていいの」

「そうか。しかし、アリスの探し物については質問していなかったようだが、よかったのかい？」

「そんなことないわよ。ラピスラズリには魔法を留めているものがある。それを知ることができただけでも十分。それに……バロンの旅に無理やりついて来ているんだから、バロンの事を優先するのは当然のこと」

私はにっこりと微笑んで見せた。

時間があまりないのはわかっていたけど、事を急いで焦ってしまつたら何もかもを失ってしまったしそうな気がした。それに、バロンが何者であるか知りたい、という思いもあった。

話し込んでいるうちに、バロンの家が見える所まで来ていた。外は少し冷え込んできているため、肌を露出している部分の感覚が、若干麻痺してきている。早く温かい場所へ行きたいと、歩くスピードが速さを増した。

ドアを開けて家に入ろうとしたとき、誰かの声が突然聞こえてきた。

「旦那、久しぶり。今日は女の子なんか連れてどうしたんだ？」
声がする方へ振り向く。そこには1本の木。木の周りに人影は見当たらない。

まさか木がしゃべりだしたの？

すると、バロンは木の上の方を見て返事を返した。

「ヤンクロックか？ わざわざ訪ねてくるなんてめずらしいな」

木の上の方に違和感がある。枝に何かが乗っかっている。私より少し大きいくらいの何かが……。

「なあに。ちょっとした情報を教えに来ただけさ」

言葉を発した瞬間、枝から影が消えた。

サツという音を立て、何かが地面に飛び降りてきた。よく見ると長い手足にガツシリとした体をしている。股下では尻尾が揺れており、背中から出ているのは翼のようだ。服装は藍色の生地にオレンジ色のラインが入ったポンチョを羽織って、下には肌色をした皮のズボンを履いている。肌が緑色をしていて、少し不気味な感じがした。

私たちの前に現れたモノ。それは怪物以外に表現する言葉がない生き物だった。

「まだ自分が何者なのか調べ回っているんだろ？ 実は今日とびつきりいい情報を捕まえてなあ」

怪物が話しかけてきた。

「そうだったのか。詳しい話は家の中で聞こうか」

バロンは平然と会話をしていた。どうやらバロンと親しい間柄らしい。私、バロン、怪物の3人は話を一時中断して、家の中へと入っていった。

ランプの明かりで、明らかに変わった怪物の姿。暗闇で見た印象よりは、少しマシな感じがする。大きな目と大きな口。おどけたような表情の顔。不気味さはあるが、気持ち悪いとは思わなかった。

「それで話というのは？」

椅子に着いたバロンは、落ち着いた調子で訊ねた。

「ああ。最近、ユナシス王国のラブリカルトという街の近くで珍しいものが目撃されたいんだ。何だと思う？ よ・う・せ・い・だ・と・よ。驚いただろ？ しかもその妖精がエルらしいんだ」

こんな場面、世界どこを探しても見ることはできないと思う。

猫の姿をしたバロンとトカゲのような姿をしたヤンクロック、話の内容は妖精の事。あまりに現実離れた会談である。そこに居

合わせているアリスという女の子だけが人間だなんて……。

「しかも目撃者がその街では有名な学者らしくてな、嘘なんて吐いた事がない正直者ときた。信憑性のある話だろ？」

「なるほど。それで、エルフの所在は掴めているのか？」

「いや、それはこれからさ。旦那が調べてほしいというなら、調べてやってもいいぜ。もちろん代金はかなり付くがな」

置いていかれている私はボーとしたまま、椅子に座っているだけだった。

「わかった。お願いしよう」

「さすがは旦那、話が早くて助かるよ」

ヤンクロックは愛くるしい表情（？）を浮かべて、指をパチンと鳴らした。

「でよ、話は変わるんだが……そこで呆けてる女の子は誰なんだ？ ヤンクロックが私に目を向ける。

「ヤンクロックには紹介していなかったな。彼女はアリス、私と一緒に旅を始めた仲間だ」

「へえ、若いのに旅かい。しかも旦那みたいな人とねえ」

ヤンクロックの眼が飛び出るように前に出てきた。品定めするように、私のことをジロジロ見ている。

「は、はじめまして……アリスです。あの……ヤンクロックさんはバロンの友達なんですよね？」

恐る恐る訊ねる。

「そうさ。タツキースって街で会った時からの仲だ。あのときの旦那は不用心でな、顔を出したまま街を歩いてたんだ。そしたら案の定騒ぎになってなあ　まあ騒ぎにならない方がおかしいがな。そこをおれが偶然助けたのさ」

ヤンクロックは大きな口を開け、笑いながら話をした。

「そうなんですか……。ヤンクロックさんもバロンみたいに不思議な力を持っているんですか？」

「いや、おれにそんなものないよ」

「そうですか……。ヤンクロックさんみたいな人と会うのは初めてだから、もしかしたらバロンと同じなのかと思いました」

「なるほど、人間から見たら俺も旦那も同じに見えるんだな。まあ人間と俺らは容姿が大きく違っているから、そう考えても不思議じゃねえ」

失礼なことを言っている私を、ヤンクロックは笑い飛ばしてくれた。

「旦那については俺もわからないが、俺は爬鳥族って種族の者だ。爬鳥族はこのように空に浮かぶ島で生活をしていて、地上にはほとんど降りてこないからあまり馴染みはないだろうがね。昔はそれなりに人間とも交流はあったんだけど……。この世界には、他にも多くの種族が生活している事を君は知らないだろう？」

「ええ。他にもいるんですか？」

「ああ 人間から見えないところでみんな暮らしているのさ。まあ、旦那みたいな力を持つ者はごく稀だけだね」

「さっき話していたエルフとか ですか？」

「勘が鋭いね。それとも知っていたのかな？ エルフは昔から不思議な力を持つ種族として有名だからね」

「つまり……エルフに会う事が出来れば、同じ力を持つ者同士としてバロンがどの誰なのか知っているかもしれないって事？」

「それもあるが、エルフは寿命が長い種族でもある。エルフの女王なら1000年位は生きていても不思議じゃない。旦那について何か知っている可能性が十分あるのさ。もし知らなくても、エルフの中にはモノの本質を見極める事ができる者がいるらしいんだ。そいつに会えさえすれば、旦那がどういう者なのか全てわかるってわけだから彼らに会う事が旦那の旅において一番の近道になるんだよ」

「そうだったんだあ……」

さっきまでの会話がようやく理解できた。

「バロン、よかったわね」

「ああ。でもエルフは用心深い種族と聞くから、会えるかどうかわからないがね」

「旦那、俺の事信用してないのか？　こうみえて探し物を見つけるのは得意なんだぜ」

「すまない。そういうつもりではなかったのだが……そうだ。アリスもヤンクロックに頼んでおくといい」

「おや？　君も何か探し物をしてるのかい？」
ヤンクロックがこっちを見る。

「ええ。私は友達が病氣にかかっていて、それを治す方法を探しているの。現状では治す方法がないらしくて」

「なるほどね……。それならドワーフの森に行くといい。確か万病に効く薬草があるって話だから」

「えっ！？　ホント？」

「ああ。俺たちの族長が実際に使ったことがあるらしくてな」

今日は、すごい日だ。バロンにとってすごい情報が入ってきたと思ったら、私にもとんでもない情報が入ってきたのだから。旅の初日でこんなことになるなんて思ってもみなかった。

メイフォルトをもうすぐ助ける事が出来る。

私の頭はそのことでいっぱいになっていた。そして、完全に舞い上がっていた。ついさっき考えていた事なんて、すっかり忘れて……。

“事を急いで焦ってしまったら何もかもを失ってしまう”

16・2日目の旅

その後も、ヤンクロックとはいろいろな話をした。

いたずら好きのゴブリン、湖の下深くに住むエンドロップ、森の木々を家として活用するカルバチカ。彼の話は、どれも具体的にそれらの生活が滲み出ているものばかり。しかも、楽しいエピソードのおまけ付き。私は夢あふれる不思議な話に、しばらくの間魅了されていた。

2時間ほど話し続けた後、ヤンクロックは家を去って行った。今からエルフを探しに行くそうだ。見つかる事を願いながら、私たちは彼を見送った。

1階のテーブルに戻ってきた時、バロンの浮かない表情が目に入った。

吉報を受けた私たち。私はうれしさのあまり舞い上がっていたが、バロンはそんなにうれしそうな様子ではないみたい。

「バロン、どうかしたの？」

「ん？ いや……少し考え事をしていたのさ」

「さっきの事？」

「私は思い切って質問を投げかけた。」

「ああ……」

「あまり嬉しそうに見えないけど、さっきの話ってバロンにとっていい話じゃなかったの？」

「いや、いい話だったよ。この旅を始めて2年ほど経つが、耳寄りな情報はほとんどなかったからね。やっと私の旅の終着地点が見えてきた、そんな感じた。ただ……」

「ただ？」

「ずっと探してきたものが見つかる、そう考えたとき急に怖くなってしまったのだよ。私の探し物は、どこかに置き忘れてきた過去の

自分。過去の自分と向き合う事を思うと、何とも言えない感じがしてね。今の私と過去の私では、歩いてきた道がぜんぜん違う。だから、受け入れる事が出来るのか、少し心配になったのだよ」

私とは違うバロンの心境。希望を抱える私と、不安を抱えるバロン。二人の違いは探していたものが未来か過去か、それだけだ。私の旅は幸せを求めるものだから、最後には必ず笑顔になれる。だけど、バロンの旅は自分を求めるもの。最後に待っているモノが、幸せだとは言い切れない。靄がかかったような気持ちで続けなくてはならないなんて、なんて辛い旅なんだろうと思った。

私が心配そうにしていたせいか、その後すぐにバロンは笑顔を取り戻していた。

気を遣いすぎなんだから……。

だいぶ夜も更けてきた頃、私たちはやっと夕食の時間に入った。

パンに、ベーコンと野菜のスープ、ゆでた卵、メインディッシュに羊のステーキ。十分お腹を満たす量だった。

満たされたお腹は身体を眠りに誘ってくる。私は片付けを済ませた後、ロフトへと上がった。

「バロン、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

電気が消された部屋をやさしい眠りが包んだ。

今日は昨日よりも早く目が覚めた気がした。ロフトから顔をのぞ

かせると、バロンがちょうど梯子を下りているところだった。

「おはよう！」

「おはよう。アリス、今日は早いんだね」

「なんとなく目が覚めちゃって……。朝食作るんでしょ？ 私も手伝うからちよつと待ってて」

いつもの倍の速さで身支度をして、バロンのもとへ駆け寄った。

今日は身体の調子がいい。やっぱり気持ちの前を向いているからかな。もう少しで目的のものが見つかる、その事が私を変えるなんて信じられないけどそれ以外理由はないし。

昨日から上機嫌の私は、今なら何でもできそうな気がしていた。

テキパキとした行動で朝食の準備はあっという間に終わった。朝食を食べている最中、私はバロンをじつと観察していた。昨日の浮かない表情が、頭に残っていたからだ。でも今はいつも通り、大丈夫そう。

「今日は昨日のお店に行くんでしょ？」

「そうだな。約束を交わしたから、まずはアルアタシスに行くつもりだよ」

「もしも時間があつたらでいいんだけど……。その後、ドワーフの森に寄ってもいい？」

「いいとも。アリスの探しものを見つけに行かないとね」

バロンは快く返事をくれた。

朝食を済ませて旅の支度をし、準備が整ったところで外への扉を開いた。

昨日より幾分も軽い足取り。空は澄み切っていて、太陽が暖かい。今日もきつといい事がある、そう思わずにはいらなかった。雲の上にいるのだから空が澄み切っているのは当然の事、だけどそんなことは考えていなかった。

今日のアルアタシスは、昨日よりも多くの人で湧きかえっていた。人の波に流されるながらジグザグに道を進んでいく。時々行き交う人とぶつかりながら、昨日のお店を目指した。

「おや？ 昨日のお譲ちゃんじゃないか！」

人ごみの中で聞こえてくる声。左に首をひねると、昨日あの石を売っていたおじさんがドツシリと構えて座っていた。

「おじさん、昨日はありがとうございました」

「なに、礼なんていいよ。今日もお買い物かい？」

「今日は昨日教えてもらったお店にちよつと用事があつて……。あれ？ あの石置いてないんですか？」

「ラピスラズリの事かい？ あれなら今朝早くに売れちまったよ。どこかのお偉いさんが高値で購入してくれてな。こっちとしてはもう今日は商売しなくてもいいくらいだよ」

おじさんは実に満足そうな顔をしていた。

「よかったですね。それにしても……今日は人が多いですね？」

「ああ。なんたつて月に一度、地方を回る商人どもが集まる日だからな。この街はガリレオン王国とユナシス王国の境目にあるんだ。で、ユナシス王国からガリレオン王国へ向う商人たちが立ち寄ってくるのさ」

ガリレオン王国 王都ベクトリアを中心に、私の住む街やメイフォルトの住む街を含めた300ある街をまとめている国。600年前の出来事以来、ほかの国に比べて飛躍的に技術が発達した国である。そのため他国よりも裕福な環境にあり、経済力のある私の国はいろいろな国とのパイプも充実している。ユナシス王国もそのひ

とつで、多くの物資を輸入しているお得意さまである。

「それでこんなに人が多いんですね」

「ああ。だから今日はおれたち商売人にとって稼ぎ時なのさ。よかったら何か買っていつてくれ？」

「私、あまりお金持っていないから……」

「それならお譲ちゃんが連れてくる人が買ってくれるんじゃないのかい？ そんな着飾った服を召しているところを見ると、どう考えても立派なトコの人なんだろう、お譲ちゃんたちは？ どうだね、安くしておくよ」

着ている服に目を向けた。私のお気に入りである朱色のドレス。ちよつと高いものだって父が言っていたような……。おじさんが私たちを良い家柄の人だと勘違いしても仕方ない状況だった。

「ご主人。申し訳ないのだが、今日は買い物をするつもりで訪れたわけではないのだ。だから私も手持ちがなくてね……。また今度寄らせてもらうよ」

「そいつは残念だ。また今度寄ってくださいな」

戸惑う私に代わって、バロンがうまく話をつけてくれた。

「ごめんなさい。また来ますね、おじさん」

そう言って、また人だかりの中へと戻っていった。

「あ、お譲ちゃんたち。今日は人が多いから盗人なんかには気をつけるんだよ。お兄さんのそのステッキも盗られないようにな！」

最後におじさんの注意を聞いて、目的の場所へと踏み出した。

ルナ・モナーニまで歩いてくるのに、昨日の2倍ほど時間がかかった。人ごみを歩くだけでかなりの時間と体力が奪われ、まるで店が別の位置に移動したのでは？ と思ってしまうた。

お店の扉を開けて中に入る。中には5人のお客さんが入っていた。

カウンターには昨日の青年ではなく、中年の女性が立っていた。
「いらつしゃい」

「あのくすみません。昨日調べ物を依頼していたんですけど……」

「ああ、あなたたちかい？　ちよつと待つてな」

そついうと、女性は店の奥へと姿を消した。

しばらくして出てきた女性の後ろに、昨日の青年が立っていた。

「お待たせしました」

青年は礼儀正しく頭を下げた。

「昨日話されていた事について調べたんだが、なにぶん昔のことだからね。なかなか見つからないんだよ」

「それじゃあ……」

「　　マルス・ファアレットという人物。確かにこの街で工芸品を作っていた職人だったよ」

鼓動が高鳴りを見せた。

「本当？」

「ああ。うちの古い帳簿で名前を見つけたよ。620年前の事で、その後あんたの街でお店を出したと考えられる。どういった人だったかはわからないけど……」

マルス・ファアレットとは職人の名前。つまり、その職人が自分の名前をお店の名前に用いたという事らしい。

「これが1日かけて探し出した結果だ。あまり役に立てなくて……ごめんな」

彼は残念そうに呟いた。

「本当はもつとでかい情報を掴むつもりだったんだけどな。昨日代金の話をしたけど、あれは……無しでいいからな」

最後にやさしい笑みを見せて、彼は奥へと引き返して行った。

「どうもありがとうございました」

私たちはカウンターに残った女性と奥にいる青年へお辞儀をした。

帰り際、バロンは財布から数枚のお札を取り出し、カウンターの

上に置いた。女性は返そうとするが、

「私たちにとつてはとても貴重な情報を教えてもらったので、どうぞ受け取ってください」

と、バロンは頑なに返却を拒んでいた。最終的に女性も受け取ってくれて、快くお店を後にすることが出来た。

昼を過ぎた街は、さらに賑わいを増していた。

17・路地裏の鉄塔

お店を出た私たちは、来た道を戻っていた。人の減らない道は行く手を遮られて、なかなか思うようには進む事が出来ない。人混みの中を歩いているため、時々肩と肩がぶつかる。その度よろけながらも、私たちは歩き続けた。

何度も体をぶつけながら進んでいくと、疲れが徐々にたまってくる。他人の体で景色は隠されて、今の位置も掴みづらい。ひとまずこの人ごみから抜け出したい、と心の中で思っていた。

その時、大きい衝撃が私を襲った。私の体は後ろへと倒される。地面に倒れこむ体をなんとか持ちこたえようとしたが、疲れた体と思うように働いてくれない。体はそのまま地面へ

地面に倒れる瞬間、無意識に手をついた。

「イタッ」

少しは衝撃を抑えたものの、お尻は思いっきり地面とぶつかっていた。誰がぶつかってきたのかを確認する。そこには少年が一人立っていた。

おそらく弟よりも年は下だろう。泥やほこりで汚れた服に身を包み、手足には何か所も怪我をした痕がある。少年は何も言わず立ち止って、私を見下ろしていた。

突っ立っていた少年は、ゆっくり身体を動かしてこっちへ近づいてくる。私の横に差し掛かったとき、手から離れたバッグを少年が拾い上げた。てっきりバッグを私に返して、謝ってくるものだと思っていたのに、少年はバッグを持ってそのまま私の元を立ち去っていく。

「あっ」

そこでやっとわかった。盗まれたんだ、と。

走り去る少年をバロンが追う。体を起こして、私もそれに続く。

人ごみで見失いそうな少年の姿をバロンはしっかりとらえていた。大通りから建物のある路地に入っていく。一人が通れるかどうかの道、そこを体を横にしながら通り抜ける。真つすぐ進むとまた大通りに出て、人波をかき分けながら追いかける。そしてまた、路地裏へ

何本もの大通り、路地裏を通り過ぎていく。途中から道が上りになり、疲れた体に追い打ちをかける。

周りにいる人の数が徐々に減ってきている。土地勘のない私には、今の場所がまったくわからない。どこに向かっているかなんて、もちろんわからない。ただバロンの後を必死に追っている。

15分くらい走り続けてきた。もうそろそろ体力の限界が近い。重くなった足はもつれそうになり、息をするのが辛くなってきた。それでもバロンの後姿を目印にして走り続ける。暗い路地を延々と走り続ける。

走る道の手先から眩い光が差し込んでいた。路地裏から抜け出たとき、辺りをつつむ雰囲気は今までのものとは変わった。

この場所はさっきまでの風景とは一変していた。レンガを用いた建物はなく、木材で建てられた家が並ぶ。その右端には倉庫があり、ずいぶん使われていないようだった。倉庫の横には3階分の高さをもつ鉄の塔があつて、予算が足らなかったのか骨がむき出しになっていた。塔の頂上には広めのスペースがあり、見張り台のような造りである。こんな場所に、いったい何のために建てられたのか……。辺りは物音もなく静かで、遠くからの音だけが聞こえる。全く人気がない場所。私が見てきたアルアタシスとは、正反対の雰囲気だった。

少年は鉄の塔を登っていく。バロンも少年に続いて登っていく。私も2人を追いかけるため、鉄の梯子に手をかけた。

少年は塔の上を目指しているようだが、そこからの逃げ道はない。あとは追い詰めていけばいいだけ。ようやく終わりが見えてきた。私は息切れした弱っている体に鞭を打って、梯子を上り始めた。

一步一步足場を確認しながら登っていく。一定のリズムで鉄の音が響き渡る。

この塔が位置する場所はアルアタシスで一番高い位置にあるらしく、上っていくと街の風景が視界いっぱいに広がっていった。

オレンジ色の屋根で埋め尽くされた世界。屋根と屋根の隙間が道に当たるところだろう。隙間の大きいところには、色とりどりの旗が掛っていて、パレードのような賑やかさを演出していた。景色の中心には噴水があり、そこから全方位に向かって建物が並んでいる。この街は噴水のある広場を中心に、円を描いたような造りをしているようだ。

私は周りを見渡しながら、塔の頂上を目指した。

梯子を登り切ると、少年とバロンが対峙していた。少年は柵にもたれるようにして、バロンをにらんでいる。

「まさかこんなところまで追ってくるなんて思わなかったよ。おじちゃんたちすごいね。これってそんなに大事なものが入っているわけ？」

「すまないが、返してくれ。何が入っているかわからないが、アリスが持ってきたたった一つの荷物なんだ」

「そんなこと言われて返すわけじゃないじゃん、バーカ」

頭の中で血が沸騰してきた。バロンは冷静な姿勢を崩していないが、私はそんな風に落ち着いてはいられなかった。

「頭にくるわね。人のものを盗っておいで」

「何言ってるんだよ。これは落ちてたもの。それをオレが拾ったから、今はオレのものさ」

ますます怒りが込み上げてくる。

「　いいわ。それなら力づくで取り返すから！」

少年に向って一步を踏み出した。少年はただニタニタと笑っているだけ……。逃げるつもりはないみたい。

それなら容赦なく捕まえてやるわ！

私は少年へと更に近づいた。

少年をじっくり観察しながら、一歩ずつ足を踏み出していく。ちょうど半分の位置に来たとき、少年は頭の上へ両手を上げた。

いったい何のまね？

疑問に思いながらも、私は一步を踏み出した。

上げられた手の片方には、鉄の棒が握られている。でも、襲ってくる気配は感じられない。諦めてしまったというわけではなさそうだが……。いったい、どうするつもりだろう？

不安がる私の後ろを、バロンがピッタリついてくる。もしもの時、すぐに助けられるようにだろう。

慎重に一歩ずつ近づいていく。

もう少し、もう少し……。

私と少年の距離は着実に縮まっている。なのに、少年は笑みを浮かべた。

なにがおかしいの？ と私が不安に思った次の瞬間、少年は大きく体を反って飛び上った。宙に浮いた少年は、後ろに目がついているかの如く見事柵の上に着地を決めた。

私は一瞬ヒヤッとした。

いったい何を考えているの？

一歩間違えば落ちて死んでいたかもしれないのに。

まさか？

私の中で嫌な予感が芽生えた。

「ちよつと、何するつもりなの？」

「何すると思う？」

私はその場に立ち止まった。もしも次の一歩を踏み出したら……。

「とりあえずその柵から降りて。もし落ちでもしたら……」

「落ちたら……死んじゃうね」

なんで笑っているのかわからない。

「いいから、降りて」

「降りたら許してくれる？」

自分の命で交渉に出てくるなんて、まさかの行動だった。応じなかったら少年を殺すことになる。私は最悪の事態を避けるため、少年に声をかけた。

「わ、わかったから。だから、そこから降りなさい」

クスリと少年は笑った。

「あんまり信用できないな」

「本当に何もしないから、だから早く降りなさい」

焦っているからだろうか、私は声を大きくして少年に訴えていた。

「うーん。まあ、信じてやるか……」

そういつて少年は柵の上から飛び降りた。

「……え！」

私の顔が青ざめていく。

確かに少年を柵の上から降りてくれた。しかし、それは安全な足場のある方ではなく、足場のない地面へ落ちる方だった。

どうして……。

スローモーションで落ちていく少年の姿を、私はただ茫然と見送る事しかできなかった。柵の向こう側を通り過ぎていく少年の顔はなぜか笑っていた。

思考が止まる。そして、罪悪感が襲いかかってきた。

少年の姿が見えなくなって、やっと私は現実に向かい合った。

動きだす時間。

私はすぐさま柵へと駆け寄った。

18・生きる強さ

柵から身を乗り出すようにして、地面を見つめる。……しかし、そこに少年の姿はない。

どこにいったの？

すると遠くから声が聞こえてきた。

「ばーか」

顔を上げて声がする方を見ると、少年は一本のロープにぶら下がっていた。この鉄塔から街の外れに向かって伸びているロープ。そのロープに鉄の棒を潜らせて、両手で鉄の棒を握っている少年。少年はそのロープを滑るようにして、街の外れへと向かっていた。その状況を目にして、私は安心した。

少年は死んでいなかった……。

ホッとする私。しかし、そんな自分を煮えたぎった怒りが、瞬時に包みこんでいった。

「こ、この……クソガキ！」

今にも柵から飛び出しそうな私をバロンが後ろから押さえる。

「アリス、落ち着くんだ！」

落ち着けですって？

落ち着いてなんて……いられないわよ！

身体を押さえられているにも関わらず、私は必死に彼を追いかけてようとした。

しばらくもがいた後、私の怒りは少しだけ収まった。

「アリス、大丈夫かい？」

バロンは心配そうな顔を覗かせている。

「うん……少し落ち着いたかも」

私は意気消沈したような声を上げた。

バロンは、私の顔をマジマジに眺めている。そして……少し笑みを見せた後で、真剣な顔つきをし、声をかけてきた。

「さて　アリス。これからどうする？」

「どうするって？」

「さっきの少年を追いかけるかどうか、ということだ」

「追いかけるって言っても、アイツはあんな遠くにいるんだよ。今から追いかけても見失っちゃうだけよ……」

「確かに、走って追いかけたら見失ってしまうだろう。それならば、あの少年と同じように建物の上を歩いてゆけばいい」

「どうやって？」

「空を　飛ぶのさ」

そう言われて、私はバロンが魔法を使える事を思い出した。確かに空を飛べば、アイツを捕まえる事が出来る。でも、人であふれかえっている街の中で魔法を使っているものだろうか？　昨日ヤンクロックが言っていたように、騒ぎになるのではないだろうか？

私は考えている事を口に出した。

「ダメよ。空なんて飛んだら、街がパニックになるわ。そうなったらこの街にもう来る事が出来なくなっちゃう。情報を集める事が出来なくなるのよ。それをわかって言っている？」

「ああ、もちろんだとも。騒ぎになることは予想できるからね。それでも、アリスにとって唯一の荷物であるあのバッグを、取り戻すことの方が大切だと考えたのだ。だから、空を飛ぶことに迷いはない」

バロンの真剣な言葉に圧倒されてしまった。私は「空を飛ぶくら

いなら荷物はどうなつてもいい』と言おうとしたが、その言葉は口から出ることはなかった。

私のバッグ、それはメイフォルトからの贈り物。私が一番……大切にしていた物。そんなことバロンは知らないけれど、それでも取り戻してくれると言ってくれた。ここまで言ってくれるバロンに対して私も強く決心した “絶対取り戻す” って。

バロンと私を光が包む。2つの光は少年の移動した場所まで、真っ直線に飛んでいった。

どこにいる？

空から少年を探す。建物内に逃げ込んでいない限りは、きっと見つかるはず。

「いたぞ！」

バロンは持っているステッキである方向を指し示した。そこには先ほどの少年がいた。古びた木造の家が立ち並ぶ中に、ポツカリ空いた空地のような広場。そこで少年は、バッグの中身を詮索していた。その周囲には10人以上の子供たちもいる。

私とバロンはその広場へと降り立った。

広場で群がっている子供たち。

そこから少し離れた所に私たちは降り立った。

「私の荷物、返しなさい！」

大きな声が広場に広がった。子供たちが一斉に、こっちへと振り向く。みんなポカーンとした表情を浮かべて、私たちのことを見て

いた。

「しつこい奴らだな……」

先ほどの少年が群れの中から出てきた。

「それは私の物なの。それを盗むなんて……最低よ！」

私は少年に向かって、怒りを露にした。

「盗んだんじゃない！ 拾ったんだって言っただろうが！」

「私にぶつかって、落とした荷物を拾ったんじゃない！ それって盗んだって言うのよ。そんなことはいいから……早く返して！」

私の言葉に、少年の後ろにいる子供たちがざわざわと騒ぎ始めた。

「盗んだもののなの？」

「お兄ちゃん……悪いことしてるの？」

子供たちは少年を心配している。

「ち、違うぞ！ お兄ちゃんがちゃんと働いてもらってきた物なんだぞ」

少年はやさしい口調で子供たちをなだめる。

「違わないわよ！ それ……私の物なんだもん」

私は容赦なく正論をぶつけた。騒ぐ子供たちは少年の言葉を聞き入れず、不安げな表情を浮かべていた。

心配する子供たちを何とかしようとする少年。その姿は、先ほどまで偉そうな態度をとっていた者とは別人だった。私たちは、その姿を黙って見守っていた。

「お兄ちゃん。本当の事を言つてよ」

一人の少女が問いかける。

「これは……だな」

少年は言葉を詰まらせた。

「お兄ちゃんが悪いことするとは思えない！ 何かの間違い……なんだよね？」

男の子が訊ねてくる。しかし、少年は黙ったままだった。その光景を見ている内に、抱えていた怒りが消えていた。そして、

なんだか切ない気持ちが胸の奥から込み上げてきた。子供たちを支えるため悪事を働いた少年があまりにも哀れで、かわいそうだと思っってしまった。子供たちもそんな少年を慕っていて、それが何とも言えない気持ちにさせた。

少年を慕う一人の男の子が、杖を突きながら少年の元へと歩んでいく。

……………。

「えっ」

私は目の前の光景でおかしな部分がある事に気づいた。少年に歩み寄る男の子。その手には杖を持っている。杖をうまく使いながら、右足を出して……一歩進み、また右足を出して……一歩進む。

使われていない左足。そう、左足を使っていない。いや……左足が無い。

他の子供をしてみる。ある少女は、右腕がない。ある少女は左手がない。ある少年は……。子供たちの身体は、人としてどこか欠けていた。

私は目を疑った。

どういう……こと？

疑問がそのまま口から飛び出した。

「ねえ……。あなた達、その身体……どうしたの？」

返事に困っていた少年が、パツとこつちを振り向いた。

「そんなことどうだっていいだろ！ おまえには関係ない！」

少年はすごい形相でこつちを睨んだ。

「……ごめんなさい」

なんとなく悪い事をしたような気分になった。

「お姉さん」

俯いている私に一人の少女が声をかけた。

「どうして私たちがこんな身体をしているのか……知りたいんですか？」

あどけない顔で問いかけてくる。私はゆっくり頷いた。

「アリッサ、余計な事は」

「私は生れつき右腕がないんです。他の子たちには、生れつきそういった身体の子もいれば、事故で失くした子もいます。それでみんな親に捨てられました。お兄ちゃんはその様な私たちを助けてくれたんです」

少年の言葉を遮って、少女は話を続けた。

「私たちが生きているのはお兄ちゃんがいたから……。だから、お兄ちゃんが悪いことするとは思えないんです。本当の事を教えてくれませんか？」

無垢な瞳が、胸を締め付けた。

本当の事を言っているのだろうか？

慕っているこの子を傷つけていいのだろうか？

私は返事をする事に戸惑った。

黙って立ち尽くしていると、バロンが私の肩をポンと叩いた。そして、一歩前に出てこっちを向いた。

「バロン……」

バロンはやさしい顔を見せた後、少女の方へと顔を向けた。

「お嬢さん、その荷物はこの子の物なんだ」

少女の瞳が微かに揺れた。

「その少年が拾ったものなのだが、元はこの子のモノ。すまないが、返してはくれないかい？」

バロンはやさしくささやいた。

少女は落ちていたバッグを拾い上げると、ゆっくりこっちへ歩い

てきた。少女の歩みを誰も止めようとはしなかった。

「はい、お姉ちゃん」

「あ、ありがとう……」

手渡された赤色のバッグ。私はそのバッグをただ見つめていた。少女はバッグを届けると、すぐさま元の場所へと帰ろうとした。

「お嬢さん？」

バロンがそれを引きとめる。足を止めた少女が、こっちへと振り返る。バロンは懷から財布を取り出して、数枚のお札を握りしめた。「落したものを届けてくれたお礼だ。感謝の気持ちとして受け取ってほしい」

バロンは、彼女の手には感謝の気持ちを乗せた。少女はきょとんとした顔をして、手に乗ったモノを握りしめていた。

私とバロンは茫然と立ち尽くしている子供たちを残して、広場からゆつくりと立ち去った。子供たちからは見えない場所へ来ると、バロンが魔法を使った。

光に包まれていく身体。

2つの光は空へと舞い上がった。

「うわああ……」

後ろから声が聞こえてくる。振り向くと、子供たちが私たちを見て声を上げていた。

「ど……同情なんてしやがって」

あの少年が口惜しそうに声を放つ。

「感謝の気持ち　だ」

バロンは大きな声で、少年の言葉を遮った。

空中を歩く2つの光。その一つはまっすぐ前を向き、もう一つは下を向いていた。

私はさっきの出来事が頭から離れず、心に霽^{もや}がかかったような気持ちでいた。

私が荷物を取り返そうとしなければ、少年も子供たちも今まで通り平穩に暮らしていた。だけど、私が荷物を取り返そうとした事で、少年への信頼は崩れ、子供たちには辛い思いをさせてしまった。この荷物をそのまま渡しておけば……。

「アリス、大丈夫かい？」

私は顔をあげた。

「……先ほどの事を考えていたのかい？」

私はうなずいた。

「そんな顔をしないでくれ。別に悪い事をしたわけではないだろう？」

今自分がどんな顔をしているのかなんて、わからない……。バロンの言葉を聞く限りでは、おそらく悪さをした後の子供みたいな表情を浮かべていたのだろう。

「アリスは……やさしい女の子なんだね」

バロンは微笑みながら、ささやいてきた。

「だがね……アリス。どんな理由があろうとも悪いことをしたのであれば、それはちゃんとやってあげないといけない。彼が自然に存在する物を取ったのであれば、問題はなかっただろう。しかし、人間の世界では違う。人間は物に所有権をつける。所有者のモノを取ったとなれば、それは罪につながる。彼を思うのであれば、正しい事を言っただけで済むべきではないのかい？」

「……うん。でも」

「ん？」

「あの子供たちはどうなっちゃうんだろう……」

「彼らなら大丈夫さ。どんな辛い事があっても、しっかり生きていける。今までそうやって生きてきたのだから。アリス、君は彼らに同情しているのかい？」

「……少し……だけ」

「それは間違っているよ。彼らはそんなに弱い人間ではない。君は病気の友達に同情したかい？ それで旅を始めたのかい？」

「……うん」

「そうだね。確かに普通の人と比べれば、彼らは少し不自由なのかもしれない。だからといって、同情される程落ちぶれてもいない。彼らは彼らなりに強く生きている。それが幸せと呼べるものではないとしても、決して不幸と言い切れるようなものでもない。君の友達だって、そう思っているはずさ。……もし、君が彼らの事を考えるのであれば、この世界自体を変えてあげないとね」

バロンの言葉に私は深く頷いた。

「それでは、君の友達を助けるために次の場所へ行こう！」

「うん！」

彼らを思うのであれば、彼らを取り巻くこの世界を変える必要がある。

メイフォルトを助けたのであれば、彼を苦しめるその病を治す必要がある。

私は気持ちを切り替えて、しっかりと前を向いた。2つの光は力強く輝きを放ち、高く高く……大きな空へ上がっていった。

19・ドワーフの森

アルアタシスからユナシス王国を横切り、東の果てを目指して飛ぶ。地上は広大な森に覆われていて、見渡す限り緑一色である。オーランスの森と呼ばれるこの場所には、古来より古の民が住むと語り継がれていて、神聖な場所として今も人の手に触れられることなく、昔から変わらぬ姿を保ち続けている。

私たちが目指すドワーフの森は、この森の中に存在する。ヤンクロックの話では、森の北東部に他と比べ物にならない程大きなトウレの木があり、その周辺でドワーフは生活しているという。

バロンから借りたコンパスを頼りに、2つの光は森を北東に進んでいた。

オーランスの森に入って10分が経った頃、森から突き出た大きな木がその姿を現した。異常なまでに成長したトウレの木。その姿は山を思わせる。一本の木がここまで大きくなるのに、いったいどれだけの時間を費やしたのだろう。普通の木ですら数十年の樹齢があるのに、ここまでなると……千年？ いや、二千年？ いやいや、それ以上かも……。人の手に触れられなければ自然はここまで成長できる事を、世界最高の高齡樹は私たちに示していた。

森に降り立った私たちは、この森が他の森とは全くの別物である事を、身をもって感じた。

そこら中に生える草木は、その身に美しい色を添えて、可憐に命を咲かせている。赤、オレンジ、黄、青、白にピンクに紫色。命の輝きが、辺り一面を華々しく飾っていた。華やかな姿だけでは森が弱々しく見えてしまうため、身体を鍛え上げた大木たちがその力強いオーラで森にインパクトを与えていた。巨大な幹がひしめく中を、鳥のさえずりが響き渡り、澄んだ空気に和やかな色を添える。空を

覆う木の枝は、太陽の光を最小限に抑え、森の中にスポットライトを作りだしていた。すべてのモノが各々の役割を全うし、その結果私の目の前には一つの芸術が誕生している。それはどんな物でも敵う事のない、心を動かすものだった。

「アリス」

横にいるバロンが声をかけてくる。私は目だけをバロンに向けた。
「素敵な場所だな……ここは」

「……うん」

「どの生き物も生き生きと生きている、そこら中に命の息吹を感じる。楽園とは、こういう場所の事を言うのかもしれないね」

私は頷いて、返事をした。言葉を交わした後、私とバロンは目の前の光景にしばらく心を奪われていた。

日が傾き、森を闇が包みだした時、ようやく私たちは立ち止っていた足を前に動かした。道と呼べるモノがないため、通る事の出来る場所が全て道となる。大木の合間を縫うように、私たちは森の中を進んでいった。

「ここから少し坂になっているようだ。アリス、身体は大丈夫かい？」

「うん、今のところは」

「そうか。なら、先を急ごう。あまり暗くなると、厄介だからな」

私は足の裏でしっかり地面を掴んで、力強く一步を踏み出した。バロンの背中を追いかけて、もう20分が経つ。辺りは闇に包まれて、小さな生き物たちによるオーケストラが演奏を開始していた。
「だいぶ暗くなってきたなあ」

「うん……。これ以上は無理かも……」

私の言葉に対して、バロンが鼻で笑った。

「大丈夫だよ、アリス」

そういうと、右手に持っていたステッキを胸のあたりに持つてきて、何か言葉をつぶやいた。すると、ステッキについている宝玉が

小さな光を灯す。光は徐々に大きくなり、辺りを照らすランプとなった。

「これなら大丈夫だろ？」

バロンが微笑みを浮かべて私にささやく。

「うん！」

安心させてくれたバロンに、私も笑顔で答えた。

宝玉の光によって再開された旅は、何本もの木々を通り過ぎて、ついにあのトゥーレの木までたどり着いた。

「……」

ここまで歩いてきたが、ドワーフらしき者と会う事はなかった。ヤンクロックの話が嘘だとは考えにくいから、私たちが道を誤ったと思われる。一日中走り回った体は体力の限界を迎え、これ以上闇雲に探し回るのは出来なさそう……。私は途方に暮れて、トゥーレの木にもたれながら地面に座り込んだ。

「見つからなかったね……」

「ああ……。残念だが、今日はここで引き揚げるしかないようだな」
バロンも諦めた顔を見せている。どうやら今日の旅はここで終わりのようだ。

「アリス、立てるか？」

「うーんと……。ごめん、バロン。ちょっと手を貸してもらってもいい？」

バロンが手を差し伸べて、私はゆっくり腰を起こした。

「今日の続きは、また明日だ。さあ、家に戻ろう」

バロンの体から光が溢れ出し、辺りが昼間のような明るさに包まれる。私の体も光を放ち、帰りの準備が整った。

「行こうか」

バロンの掛け声と共に、私たちは空に向かって上がっていく。地上を離れ、森から抜け出そうとしたとき、宙へと舞い上がっていた身体が急に動きを止めた。

「バロン、どうしたの？」

「すまない、アリス。ちょっと気にかかるモノを見つけて……。あそこで光っているモノはなんだろう？」

バロンがある方向にステッキを向ける。そこには、暗い闇の中で小さく光っているモノが何個も集まっていた。

「本当……。あれって何なんだろう？」

私もその光が何であるのか気になった。

「降りて調べてみるか」

「うん」

バロンの言葉に頷くと、2つの光は地上へと舞い降りていった。

光を放っていたモノを調べるべく、私たちは森を進む。

近づいてゆくと、それが丸みを帯びたランプである事に気づいた。

更に、そのランプの向こう側で誰かが動いている事もわかった。

「もしかして……」

その場所が何であるかの答えが、だんだん予想できてきた。

「ああ。おそらく、あの場所がドワーフ達の暮らしている所だろう」
バロンがハッキリと答えを提示した。どうやら間違いないらしい。
ついに目的の場所を見つけたようだ。

私とバロンは歩みを速めて、目的の場所へと駆けだした。

「おい、止まれ！」

闇から放たれた警告に足が止まる。

「お前ら、何者だ？」

鼻にかかったような声が、私たちに問いかけてくる。

「私はバロン。ここより遠く離れたリサルドという村からやってきた者だ。そういう君は誰なんだい？」

「俺かあ？ 俺はこの森に昔から住む者だ。それより、お前らは何しにこの森に来た？」

「私たちはドワーフに会いに来たの。どんな病でも治すことのできる薬草があるって聞いたから」

「あなた、まず名前を名乗りなさい」

また別の声が問いかけてくる。今度は女の子のようだ。

「ごめんなさい。私はアリスと言います。ガリレオン王国のレアドールという街から来ました」

「ふん」

偉そうな口をきいてくる彼らに、私はちよつとム力ついた。

「本当に薬草だけが目的か？ 他に何かあるんじゃないのか？」

「本当よ」

「人間の言う事なんて、信じられないな。人間はよく嘘をつくんだろ？ 色々とは話は聞いてるぞ。むやみやたらと森を荒らして、自分たちの物にするって。お前たちもそうじゃないのか？」

「違うわよ！ 他の人がどうかなんて知らないけど……私たちは違う！」

「そんな怒ったように言われたら、ますます信じられないよ」

「ホント。あなた達がどういう人かなんてわからないしね」

森から聞こえてくる声は、私たちの事を疑ってやまない。それだけ人間の行いが酷いものなのだろうか……。

「君たちがそうやって信じないのは勝手だが、相手に姿を見せないで好き放題言うのは幾分失礼ではないのかい？」

バロンが口調を変えて、彼らに問う。

「フン！ お前らなんかに見せるほど、安い顔をしてないからな」

「そうか。なら、少し強引ではあるが、その顔を見させてもらおうとしよう」

そういうと、バロンは声のする方に向かって右手を振り上げた。

次の瞬間、ステッキに灯っていた光が宝玉を飛び出して、空中を飛んでゆく。ある距離まで飛ぶと、光の球はパツと弾けて覆ってい

た闇を吹き飛ばした。

「うわあああ」

「キヤッ」

照らし出された森の中、木陰から身体をちょこんと出した2人の子供が姿を現した。私の2分の1程しかない背丈、鮮やかな緑色をした髪、身を包む服には自然にある素材が使われていて、森の民と呼ぶには相応しい格好である。

姿を見られた子供たちは、怯えたような表情を浮かべた。そして、『チクシヨ』と声を上げると、逃げるようにランプが集まる場所へと走り去っていった。

「それでは、私たちも行くのでしょうか」

バロンの声に導かれるよう、2つの足音は彼らの向かった場所へと近づいて行った。

森の中に忽然と姿を現した村。空からでは確認する事の出来なかった自然と共存している村。木の中に住居を作り、家の外　玄関となる場所にランプを吊り下げている。私たちがずっとランプと思っていたモノは、どうやらランプとは別のものらしい。どういった原理で光を出しているのかわからないが、その黄色がかったオレンジ色の光は見ている私の心を優しく包み、落ち着かせてくれた。

私たちが村に足を踏み入れた時、村の入口にはさっきの子供たちと同じような恰好をした人々が待ち構えていた。

「こんな時間に訪れてくる者がいようとは、非常に珍しいですな」

髭をモシヤモシヤと生やした老人が、こっちへ歩み寄ってくる。

「あなた方は、どういったご用件でこの村を訪れたのですかな？」

「私たちは、この村にあると聞く万病に効く薬草を求めてここに来ました」

「そうでしたか。先ほどある村の子供が『あやしい2人がこっちに來ている』と言っていました、どうやら間違いのようですね。もしかして、子供たちから何かされましたか？」

「いえ。特に何かをされたわけでは……」

「ホッホッホ。すみませんね、いたずら好きな子供が多いものでして。客人にはよく迷惑をかけてしまうのですよ。概ね遊び相手が出来たと思って、からかっているのでしょうか。気分を害されたのであれば、私が代わって謝ります。ですので、子供たちの事は許してやってください」

「そんな心配なさらなくても結構ですよ。少しじゃれ合っただけですから」

バロンは落ち着いて答えた。

「そうでしたか。そう受け取ってもらえたのであれば、私としては嬉しいです。それでは、話を戻しましょうか。え」と薬草についてでしたかな？」

「はい」

「うゝむ。少し……長い話になるので、よろしければ家の中で話しませんか？」

「あなたがそうおっしゃるなら……」

私たちはドワーフの老人に連れられて、ある家の中へと招かれた。

大木の中に作られた家。少し小さめの部屋には、小さなテーブル、小さなイス、小さな食器棚に小さなベッドが置かれている。私たちの家をそのままミニチュア化したような部屋である。天井は私より少し高いくらいの高さで、バロンの頭が天井に少しふれている。

老人の案内により、私たちはイスに腰をかけた。

老人がキツチンに入って飲み物を用意している間、私は狭い空間に違和感を覚えて、キョロキョロと辺りを見渡していた。

「どうされました？」

「あつ！ すみません」

「何か不思議なものでもありましたか？」

「そついうわけじゃ……」

私は天井から垂れさがっているランプに目を向けた。

「なるほど、そういう事ですか。珍しい木の実でしょ？」

「ええ」

「あれは、アダムの木から取れた果実なんですよ。他の植物に比べ、果実の表面が透けており、果実の中に強い生命力が秘められているため、その力がこうやって光となり、外に漏れているのです。不思議でしょ？」

「はい……」

「植物の中でも、これほどの光を放つモノはないですからね」

老人は目じりにしわを寄せて、微笑んだ。

「さて、話をしましょうか。あなた方が求めている薬草とは、おそらくレストア草の事でしょなあ。レストア草が咲かせる花の蜜には、万物すべてのモノを元に戻す力があると謂われていますからね。レストア草は、この地方にしか生息しない、またこの地方でもある場所에서만育たないという非常に珍しい植物です。更に、花を咲かせるのは年に一本のみという不思議な生態を持っています。探すのは、非常に困難でしょうなあ」

「そうなんですか……。でも、私たちが探しているモノは、その草に間違いないと思います」

「……そうですか。ならば、教えるしかありませんね」

そういつてドワーフの老人は、薬草が生息する場所について詳しく説明してくれた。

「本当に探しに行かれるのですか？」

「はい。その草を求めている人がいるので……」

「別に止めはしませんが、探す時は十分注意してくださいね。最近、ヒュドラがうろついているという噂ですから」

「ヒュドラ？」

「ええ。無数の頭を持つ大蛇の化け物ですよ」

老人は表情を曇らせた。

「……アリス。今回の旅は、少し危険すぎるかもしれない。止めた方が良くもしれん」

「でも……」

「普通に探すことですら困難であるのに、その近くには危険な生き物までいる。考えを改めた方が良くはないか？」

「えっ……」

いつでも私の味方であったバロンが、初めて私を否定した。今までそうだった事がなかったからだろうか、私は驚きのあまり一瞬思考が止まってしまった。

「君が友を想う気持ちは、よくわかるが……今回だけは考え直してほしい」

その言葉に、私は何も反応することができなかった。

「……さて、夜もだいぶ更けてきたようですね」

家の外に目を向けて、髭を触りながら老人がつぶやく。

「今日はどうなされますかな？ 泊っていかれますかな？」

「ええ……。そうして頂けるのであれば、お言葉に甘えて厄介になるうかと」

「わかりました。それでは、今から用意しますので、しばらくここでお待ちください」

そういつて老人は外へと出ていった。2人だけになってしまった家の中で、私とバロンは一言も声を発さず、ただ俯いて老人の帰りを待っていた。

しばらくして、戻ってきた老人は私たちをある宿屋に案内してくれた。宿の中は客人を招くために作られているため、先ほどの家よりも広々とした空間があった。

私は宿の一室に入ると、そのまま崩れるようにベッドへと倒れこんだ。疲れていたという肉体的理由もあるが……それ以上に、バロンから今回の旅をやめるよう言われた事で私のやる気が失われてしまったという精神的理由の方が大きかった。

バロンならどんな無茶にも付き合ってくれと思ってたのに……

ベッドを転がりながら、消化しきれない気持ちを振り回した。

「……アリス」

隣のベッドに腰をおろしたバロンが声をかけてくる。

「君の気持ちはわかる。だけれども、危険と分かり切っている事を簡単に了承するわけにはいかないのだよ。わかってくれるかい？」

「……うん」

「君には辛い思いをさせる事になると思うが、今回だけは……」

「……わかった」

「すまない……」

そういうとバロンは、部屋に置いてあるアダムの実を布をかぶせて、明かりを落とした。

部屋を静かな闇が包み、私はゆっくり目を閉じた。

20・夢から覚めて

煌びやかに彩られた街の風景。その中を私は歩いている。周りには、光を灯した街灯が立ち並び、夜の街を照らしていた。

少し歩いた先に、一軒のお店が見えてきた。青、赤、黄色、オレンジのランプに彩られた、とても明るいお店である。私は歩を進めると、迷うことなく、そのお店のドアに手をかけた。

チリン、チリン

ドアの向こうには、外よりももっと鮮やかな世界が広がっていた。お店に設置された4つの棚には、宝玉を使用して作られた商品が並び、どの商品からも暖かい光が漏れている。商品を横目に足を進めると、商品たちが少しずつ表情を変えて私の方へと光を飛ばしてきた。その光に導かれるよう、私は膝を曲げて商品をじっくり観察した。

「そろそろ来るだろうと思っていたよ」

聞こえてきた声に体が反応する。私は頭を上げて、声の主の方へ顔を向けた。

「やあ」

手を上げて、挨拶してくる一人の男性。長身の体に筋肉が程良くついている。

「久しぶりだな、マルス」

私は男性に返事を返した。

マルス　本名マルス・ファアレット。この店の主人にして、店に置いてある商品の創作者である。

「君から頼まれていたモノ、もう出来てるよ」

マルスはカウンターの下へ身を屈めると、白い布に覆われたモノを取り出した。

「ほら」

私はマルスの元へ歩み寄り、彼の手に持っているモノを受け取った。

「商品が君の依頼と合っているか、一応確認してくれ」

マルスの言葉に従い、白い布を取り外していく。布を取り除くと、そこから一本のステッキが顔を出した。

「どうだ？」

「うむ。間違いない、私が頼んでいたモノだ」

青い宝玉が、先端に取り付けられたステッキ。私の格好に似合うよう、余計な細工は施されていない。全体を白でコーティングされていて、清楚な感じを思わせる。

「久しぶりにやり甲斐のある仕事だったよ」

笑いながら、マルスは口を開いた。

「ありがとう、マルス」

「どういたしまして……といっても、こっちは商売でやっているんだ。礼には及ばないよ」

「そうか。あ、代金がまだだったな」

私は慌てて懐に手を伸ばした。

「いや、いいよ。今回の依頼は、俺がやってきた仕事の中で最も楽しめた仕事だった。だから、それは君への饞別って事でプレゼントするよ」

「　　いいのか？」

「ああ」

そういつて、マルスは満足げな顔を見せた。

「これで君は魔法を使う事が出来る。やっと探し物を見つけに行く準備が整った、という事だな」

「ああ。やっと、すべてが揃った」

私の顔に強い意志が宿る。

私は……いったい何を探しに行くんだ？

疑問に答える者はなく、もう一人の私とマルスは話を進めた。

「俺に出来る事は何もないが、君が無事旅を成し遂げる事を心から祈っているよ」

「何から何まで世話になって……本当にありがとう。危険な旅になるが、戻ってきたら絶対君に会いに来るよ」

そういつて私はマルスに別れを告げた。

ちよつと待つてくれ。

私は何を探しに行くんだ。答えてくれ！

もう一人の私は問いかける言葉を無視して、そのまま店を立ち去った。

暗闇の中、バロンは目を覚ました。

彼は起きあがろうとはせず、天井を眺めたまま何かを考えている。

私の探しものとは？

彼が昔の記憶を夢の中で見るのは、これが初めての事ではない。以前、リサルド村の近くで、彼に関するモノが見つかった事がある。そこは彼が倒れていた場所だった。見つかったのは、一枚のメモ。メモにはこう記されていた

あなたの依頼、引き受けました。
しばらく時間がかかると思いますので、1ヵ月後にまたお越しください。

工芸品の店：マルス・ファアレット
住所：レアドール3番街1 - 14

そのメモを見つけた日、彼はマルス・ファアレットというお店を訪れた夢を見た。夢はお店を訪れたところで終わり、その後どうなったのかはわかっていなかった。今日見た夢は、その続きに当たる。
「ハア……」

バロンは大きく息を吐いた。
手がかりとなる物が夢の中で見つかった。しかし、それはハツキリとしないあやふやなモノ。何か胸につつかえたような、そんな気分だった。

バロンは夢の中でもう一人の自分が、危険を顧みず旅に出ようとしている事についても、何とも言えない気持ちにさせられていた。ついさつきアリスの事を否定しておいて、自分はその否定した行為を実行していたのだから。

バロンはアリスのベッドの方に身体を転がした。
「アリス」

暗闇の中で、彼女を観察する。

「アリ……ス？」
彼は変な声を上げた。

ベッドに寝ているはずの、女の子。その姿がどこにも見当たらない。

その事に気づいたバロンは、布団を蹴っ飛ばしてベッドから飛び起きた。

アリスのベッドに近づいて確認する。しかし、彼女の姿はどこにもない。

バロンは焦りながらも辺りを確認するため、アダムの実にかかっている布を取り払おうとした。しかし、布がかぶさっていた場所からアダムの実が消えていた。

アリス、どこに行ったんだ？

バロンは一瞬疑問に思ったが、すぐに彼女がどこへ行ったのかが見当がついた。

「まさか……」

バッグの中を調べる。入れていたはずのコンパスがない。

予想が確信へと変わっていく。

バロンは血相を変えて、暗い部屋を飛び出した。

彼が向かった先は村長の家。たどり着くと、バロンは声を荒げながらドアを叩いた。

「夜分にすまない。緊急の用事が起きた。すまないが、ここを開けてくれないか」

ノックするドアの向こうから、髭を生やしたドワーフの老人が現れた。

「どうなさいました？」

「私の連れが、突然消えてしまった。おそらく、薬草を探しに向かったのだと思う」

「なんですと！ こんな夜更けに……」

「あまり話をしている時間はない！ すまないが、薬草がある場所の方角を教えてくださいか？」

「ええ……。わかりました」

そついうと、老人はとある方向を指さした。

「今の時間帯は、ヒュドラが活発に動き出す時間でもありますので、どうかお気を付けください」

「ありがとう」

手短にお礼をいうと、バロンは老人が教えてくれた方向に向って走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9874c/>

耳をすませば～青い鳥が運んだ想い～

2010年10月10日00時28分発行